

日本ルーラルナーシング学会誌

Japan Journal of Rural and Remote Area Nursing

第8巻 2013

原著

里山の暮らしにおけるソーシャル・キャピタルの特徴
—里山に暮らす高齢者のインタビューを通して—

吉村 隆, 北山秋雄…… 1

研究報告

離島保健師が離島内に居住することと地域看護活動との関連

青木さぎ里, 春山早苗…… 17

第7回学術集会

基調講演	31
シンポジウム	33
総会報告	36

日本ルーラルナーシング学会誌投稿規定	44
編集後記	47

原著

里山の暮らしにおけるソーシャル・キャピタルの特徴 —里山に暮らす高齢者のインタビューを通して—

Feature of Social Capital in the Life of SATOYAMA
—Through Interviews of Elderly People Living in the SATOYAMA—

吉村 隆*, 北山秋雄**
Takashi Yoshimura*, Akio Kitayama**

キーワード：里山，暮らし，高齢者，ソーシャル・キャピタル，自然，質的帰納的研究

要旨

今日わが国の里山では、コミュニティ機能の崩壊が引き起こす健康への負の影響が顕著であるが、このような問題に対し近年ソーシャル・キャピタル（Social Capital：以下SC）という示唆に富む概念が登場した。そこで本研究では、里山の人々の暮らしにおけるSCの特徴について探求することを目的とした。調査対象者は里山に居住する高齢者10名。調査期間は2010年9月から2011年11月である。今回の結果から、コード総数726、サブカテゴリ総数36、カテゴリ総数14という結果が得られた。里山では自然がSCの重要な要素のひとつとなりうる可能性があり、また人々の信頼感、助け合いやネットワークを強化する要素とも密接に関連している可能性があることが示唆された。したがって、今後はこれまでに示されているSCの各要素と自然関連要因がどのように関連しており、さらに健康への影響についても量的研究等で検証していくことが望まれる。

Abstract

A community function is collapsing in SATOYAMA of Japan. This phenomenon may cause negative influence on people's health. For such an issue, a suggestive concept called social capital (hereinafter collectively referred to as "SC") timely appeared in recent years.

While focusing on the lives of the people of SATOYAMA, this study was to explore whether the SC is present in the life in any form.

The subjects were 10 elderly people living in SATOYAMA. The study period was November 2011 from September 2010. In the study, the semi-structured interview was performed and data analysis was conducted by qualitative induction analysis. The 726 codes, 38 subcategories and 14 categories were obtained from interview data, respectively, and they were classified into four domains. Four domains were "Relationship with the community and neighborhood", "Awareness and attitudes towards community", "Relationships within the community", and "Relationship with nature."

In SATOYAMA, the nature might constitute a core factor of SC, and it suggested that it might also affect trust, a norm, and a network among people.

Therefore, further study should be to examine the relationship between each factor of the SC and the nature. In addition, it is necessary to verify the related to people's health.

受付日：2012年10月31日 採択日：2013年4月30日

* 長野県看護大学大学院 広域看護学領域 里山・遠隔看護学分野 博士後期課程 Nagano College of Nursing

** 長野県看護大学 Nagano College of Nursing

I. はじめに

1960年代の高度経済成長によって、わが国の中山間地域では、過疎化、高齢化、少子化により、産業、交通、教育、医療をコアにしたコミュニティ機能の崩壊が進行している¹⁾。このため、中山間地域では長い歴史的伝統が作り上げた集落機能、すなわち“資源管理機能”（集落の有する地域資源を維持・保全），“生産補完機能”（農林業の生産活動やその他の経済活動を住民同士で相互に補完）や，“生活扶助機能”（集落行事の開催などの地域自治活動や、冠婚葬祭における助け合いなどの相互扶助などの機能）²⁾が衰退の一途を辿っているため、人々の暮らしが崩壊する危機に直面している。しかし集落機能とは、生業やそこから生まれた風俗や文化からなる人々の長い営みから形成されたものであるため、生活史全体が複雑に絡み合った総体と捉えることができる。そう考えるとこのような集落機能の崩壊は、少なからず住民の健康へ影響を与えていると推測することができる。このようなことから、わが国の中山間地域においては、人々の健康を支援する手立ての開発が喫緊の課題であると考えられる。

近年このような問題に関し、ソーシャル・キャピタル（Social Capital：以下SC）という概念が関心を集めている。SCの概念については、様々な研究者によって定義づけがなされているが（表1）、米国の政治学者Putnam³⁾は、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、信頼、互酬性の規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義し、これがSCの研究を全世界へ広げる契機となった。これまでの研究では、

SCが豊かな地域ほど死亡率が低く⁴⁾、主観的健康感が高い^{5)~7)}、また精神病の有病率が低い⁸⁾など、人々の健康に好ましい影響を与えることが示唆されている。

看護学領域においても、地域住民の健康にSCは密接に関連しており、保健師が地域のSCに関連する一側面（地域内のつながりやまとまり、活動への積極性など）を重要なものとして捉えている⁹⁾ことや、その概念を看護研究に取り入れることの有用性¹⁰⁾などが指摘されるようになり、実際のプライマリ・ヘルスケア（Primary Health Care：PHC）¹¹⁾においても、住民の保健に関する認識、コミュニティ・ヘルス・ワーカー（community health workers：CHW）と住民の間の信頼関係、住民組織内の規範や住民との信頼関係など6つの領域でSCが機能することが重要だと指摘されている。また田上¹²⁾が、今日的な健康課題の根底には、家族や地域さらには社会組織におけるわが国の財産ともいえる絆や関係性の崩壊があるということを指摘しているように、今日SCの概念は、地域で活動を展開する看護職にとっては今後ますます理解すべき概念¹³⁾となっている。しかしながら一方では、SCの有用性を認めながらも、その万能薬的な効果だけを評価し批判することなく無条件に看護活動に採用することに危惧をいだく指摘¹⁴⁾もあり、こういった点を踏まえSC論においては、質的研究の必要性を指摘するものも少なくない（e.g. Carpiano¹⁵⁾, Whitley¹⁶⁾）。

わが国においても市田¹⁷⁾が、地域のSCは地域住民個人の特徴だけでは説明しきれず、地域の特徴を反映していることを指摘しているように、わが国の

表1 主なSCに関する調査研究の歴史と定義

年次	研究機関・研究者
1993	R. Putnam 政治学者（アメリカ） SCを、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴と定義している。1970年代の地方制度改革以降の南北イタリアの州政府の制度パフォーマンスの違いを説明する概念としてSCを用い、市民協同体指数（civic community index）を用いて分析。
その他	下記の研究者、機関がSCを定義している
1916	L. J. Hanifan 教育学者（アメリカ）
1986	Pierre Bourdieu 社会学者（フランス）
1988	James S. Coleman 社会学者（アメリカ）
1999	F. Fukuyama 社会学者（アメリカ）
2000	World Bank（世界銀行）
2000	Wayne E. Baker 経済学者（アメリカ）
2001	OECD（経済協力開発機構）

出典：Putnam³⁾、JICA¹¹⁾、内閣府³⁵⁾などから作成

文化や習慣が作り上げた社会と、そこに暮らす人々との関係性がどのようになっているかを深く理解し、SCを探求していく質的研究の必要性が指摘¹⁸⁾されている。

このようにSCという概念は示唆に富むものであるが、明らかにされていない点も多いため人々の暮らしを入念に調査し定性的に捉えていくことが不可欠であるといえそうである。

そこで本研究では、自然環境をはじめ社会文化的脈絡の影響を強く受けると考えられる里山で、集落の人々の暮らしに焦点をあて、SCの特徴について探求することを目的とした。

なお、本研究での里山定義は、「原生的な自然と都市との中間に位置し、地域住民の生活と密接に結びついた森や農地などに係る様々な活動を通じ、人間と自然との持続可能な相互依存関係および経済的な営みがみられる限定された地域」とする。また、SCについては、様々な議論がなされているが、本研究ではPutnamの定義を援用し「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、信頼、互酬性の規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と操作的に定義する。

II. 研究方法

1. 予備調査

里山のSCに関する聞き取り調査のためのインタビューガイドを作成するため、2009年8月上旬～9月中旬、2010年5月中旬～7月上旬にかけ長野県内の中山間地域3か所でフィールドワークを実施した。フィールドワークの中で実施したインタビューに関しては、はじめに関連する文献^{2), 3), 19)～21)}を参考にして調査の枠組みを作成した。調査の枠組みは、現在及び将来の集落に対する思い、生業および生産体験、集落の伝統や文化、近所づきあい、集落活動などについて、いつ頃、誰が、どのように関わり、それをどのようにとらえているかなどを問う構成となっており、これを使用して焦点集団面接法

(focused group interview)による調査を実施した。なお、この際その他の資料として、自治体の刊行物や歴史的な文献などの既存資料から、関連情報（文化、伝統、農業、俗信、生業、生産、消費など）をフィールドノートとして書き出した。また、調査を含むフィールドワークは、Dudwickら²²⁾の、SCを質的に把握するための6つの分析的フレームワーク、すなわち、グループとネットワーク (groups and networks)、信頼と団結 (trust and solidarity)、集団行動と協力 (collective action and cooperation)、情報とコミュニケーション (information and communication)、社会的結合と包摂 (social cohesion and inclusion)、エンパワメントと政治的行動 (empowerment and political action) を踏まえつつ、これらのフレームワークでは捉えきれない要素が出現する可能性を視野に入れながら行った。質問は「集落の行事はいつ頃どのようなことがありますか、どのように関わっていますか、それはどうしてですか」や「日頃の近所づきあいについて教えてください、そこではどのような関わりがありますか、それをどう感じますか」などと問いかけた。また、調査場面では、参加者が他の参加者からの刺激を受けて自分の気持ちや考えを深く探求できるよう配慮した。なお、調査結果の分析の際には大学研究者より適宜スーパーバイズを受けた。

2. 本調査

(1) 調査地区の概要

岐阜県の南東部に位置するN市は、平成の大合併により7町村が合併してできた人口約8万人の市である（表2）。市域の約8割は森林で占められており自然豊かな地域であるが、標高1,600mを超える山々がそびえているため、山地が多く断層も縦横に走っている。市内の本流である木曽川に注ぐ支流は数多くあり、その支流沿いに広がった河岸段丘が生活の場となっている集落も多い。市の中心部は、かつて中山道の宿場町として栄えた地区であるが、中心部

表2 調査地区の概要

名 称	人口 (人)	世帯数	高齢化率 (%)	地域類型
N 市	80,910	27,885	25.9	中間農業地域
H 地区	3,284	1,017	26.0	中間農業地域
K 地区	889	299	29.6	山間農業地域
N 地区	9,339	3,479	28.3	中間農業地域
S 地区	4,667	1,558	31.8	中間農業地域

資料) 平成 22 年国勢調査、農業地域類型別区分一覧表から作成

表3 調査対象者

インフォーマント			インタビュー		
略称	性別	年齢	居住地域	回数	時間 (hr)
A	男	72	H 地区	1	1.5
B	男	77	K 地区	4	2.8
C	男	65	N 地区	2	2
D	男	70	N 地区	1	1
E	男	66	S 地区	2	2
F	女	84	S 地区	3	2.3
G	女	77	S 地区	1	1.25
H	女	68	S 地区	1	1.25
I	女	70	S 地区	1	1
J	女	65	S 地区	2	1.5

以外は山岳丘陵地帯が多く農用地面積が少ないため、住民の大部分は市街地へ働きに出ており、そのために兼業農家となっている世帯も多い。近年では名古屋市を中心とする都市圏との関係が強くなりつつある。

(2) 調査対象者

N市郊外にあるH地区、K地区、N地区、S地区、に在住する高齢者10名。インタビュー内容が理解でき、現在の地域での居住年数が30年以上の者とした(表3)。

インタビューが複数回に及んだ対象者の場合は、毎回のインタビュー時、前回のインタビュー内容の確認や十分に聞き取りができなかった部分の質問をおこなった。

(3) 調査期間

2010年9月から2011年11月

(4) 調査方法

研究者が勤務する医療機関の患者へ研究への協力依頼に関して口頭と文章で説明し、同意が得られた者に半構成的インタビューを実施した。その後は、スノーボールサンプリングを採用し、上記の条件を満たすものに研究協力を依頼した。

本研究では、地域で暮らす対象者の生活の場における、社会心理的文脈を理解しそこからSCの存在様態を捉えることが重要であると考えているため、地域の刊行物や歴史的な文献などの既存資料から関連情報(文化、伝統、農業、俗信、生業、生産、消費など)を得るのに加え、地区担当の保健師とも情報交換を行い、対象者からあるがままの日常を語ってもらえるように努めた。

(5) 調査内容

予備調査から作成したインタビューガイドを使用し、集落の伝統や文化、近所づきあい、集落活動などについて予備調査と同様な方法で問いかけた。ま

た、回答内容には特に制限を設けず、対象者には普段の暮らしのありのままを語ってもらえるように努めた。

(6) 分析方法

インタビュー記録は、対象者の了解を得て録音すると同時に、インタビュー中にメモを作成し、終了後直ちに書き起こした。データの分析は[コード化/カテゴリー化]の方向性をもって質的帰納的に分析をおこなった。この際、Dudwickら²²⁾の提示する6つの側面を踏まえるとともに、予備調査から得られた自然というキーワードを丁寧に取り扱い、解釈可能な最少単位で全てコード化し構造化した。構造化したカテゴリーの意味領域を明確にしたうえで、カテゴリー内、他のカテゴリーとの対比を加えながら意味関係に基づいてカテゴリーの統合を進めた。この過程では、里山の社会心理的文脈を考慮しながらSCが存在する時と場所、そしてその状態、さらにはそれに関連する人々の認識が浮かび上がってくるように配慮した。全てのデータをコード化し、類似したものをまとめたサブカテゴリー、さらにまとめたカテゴリーというようにまとめ、構造化および統合し命名していった。ここでのサブカテゴリー、カテゴリーが里山のSCの概念であり因子である。

また、データを何度も読み返す中で、新たなカテゴリーの追加が必要になった場合は、構造化の組み直しをおこない、再度統合を進めるという作業を繰り返した。その他、対象者の表情や服装などの非言語的な部分についてデータ化したフィールドノートも参考にした。

質的データの真実性と厳密性を確保するため、データの解釈は大学研究者とともに複数でおこなうのと同時に、各コード、カテゴリーの排他性や特徴などを明確化しながら全体として整合性のとれた分割となるように各データを慎重に吟味し分析した。また、

表4 里山のSCを説明するカテゴリー

カテゴリー（コードの割合 ^{注1} ）	サブカテゴリー（語った対象者の略称）	コード数
領域Ⅰ.地域や近所との人間関係を説明するもの		
集落の人とのふれあい（14.4%）	集落のことを知りたい（A, C, G, H, I, J）	26
	集落の人と会って話をしたい（A, E, F, H, I, J）	49
	話したり交流できる（A, B, C, D, J）	14
	集落の人と話したり出会うのが楽しみ（D, F, G, I）	16
和を大切にしたい暮らし（10.0%）	近所と違うことはしない（B, C, D, G, H, I, J）	30
	迷惑かけない（B, E, F, G, I, J）	9
	調和を大切に仲良くやる（A, B, F, H, I, J）	34
暮らしの中にある人間関係の絆（16.8%）	近所同士お互い思いやる（C, D, E, F, G, H, I, J）	32
	つながりを維持することが大切（C, E, H, J）	20
	集落の冠婚葬祭に関わりたい（B, G, H, J）	11
	隣近所は助けてくれる、何でも相談できる（A, E, F, G, D）	25
	近所は気心が知れている（A, B, E, G, H, I, J）	30
	近所の期待に応えたい（A, I）	4
集落の中で役立つこと（3.2%）	集落の中で役立ちたい（A, B, E, F, G, H, I, J）	23
集落内や近所との助け合い（6.9%）	家になにもものを色々あげたり、もらったりする（A, B, C, E, F, G, H, I, J）	25
	助け合いがある（A, B, D, E, F, G, I, J）	25
集落の一員である自分（2.8%）	集落の一員とを感じる（A, B, C, G, H, J）	16
	集落で自分が果たすべきことがある（A, C, D, I）	4
領域Ⅱ.地域への意識・態度を説明するもの		
集落への愛着（8.9%）	この土地が好き、ここが一番いい（全員）	54
	集落のことは何もかも知っている（B, E, G, H）	6
	ここでの生活や集落そのものが財産（C, D）	5
文化や伝統の継承（5.0%）	しきたりや伝統を守っていきたい（全員）	36
集落存続への希望（5.2%）	集落を自分達で改善させ残したい（A, B, C, D）	20
	集落が続いてほしい（B, C, E, F, H, I）	18
領域Ⅲ.地域内の関係性を説明するもの		
集落のまとまり（5.2%）	絆、団結力やまとまりがある（A, B, C, D, E, F, H）	38
集落内で集まる機会の減少（4.1%）	集まる機会が少なくなった（A, B, D, E, F, H, I, J）	30
新参者の受け入れにくさ（1.9%）	新参者とは付き合いがない（E, J）	4
	新参者との付き合い方がわからない（B, E, F, I）	10
領域Ⅳ.自然との関係性を説明するもの		
自然と共生したくらし（12.9%）	自然のお陰で生きている（B, F, H, J）	20
	自然の中で生活する喜び（A, B, C, E, F, G, D）	33
	自然を身近に感じる（C, F, H, J）	13
	自然が健康に役立つ（A, C, D, G, H, J）	18
	自然の心地よさ、安らぎ（A, D）	9
	自然への畏敬の念（B）	1
自然を守りたい（2.6%）	自然を大切にしたい（A, B, C, E, F, H, I）	12
	いろんなものが共存できる自然にしたい（A）	7
総数	14	36
		727

注1 全コード数に対するカテゴリー内の合計コード数の割合。

分析結果を調査対象者に戻し、内容を確認してもらい意見・感想等を得ることで妥当性の確保を図った。そして、カテゴリーが出尽くした時点で状態が飽和したと判断し、データ収集と分析を終了した。

(7) 倫理的配慮

本研究は長野県看護大学倫理委員会の承認を受けておこなった（承認番号：2010-25）。調査に際しては、本研究の趣旨と研究参加者の権利を口頭と文書によって説明し、1）研究への協力は自由意志によること、2）本人が研究参加を断っても何ら不利益を被ることはないことを保証した。また、3）プラ

イバシーは保護されること、4）調査開始後でもいつでも中断できることを伝え、5）データは本研究の目的以外では使用せず、分析後紙データはシュレッダー等を用いて廃棄し、電子データは復元できない方法で完全に消去することを伝え、本人の研究への参加の了承を得た。

Ⅲ. 研究結果

分析の結果、導き出されたサブカテゴリー、カテゴリーは表4の通りである。総コード数は727、サブカテゴリー総数36、カテゴリー総数14であった。

なお、コードの割合とは、全コード数に対するカテゴリ内の合計コード数の割合である。また、語った対象者の略称とは、サブカテゴリに含まれるコードを語った対象者の略称である。

そして各カテゴリは以下の4つの領域に分類された。すなわちひとつ目は、「集落の人とのふれあい」「和を大切にしたい暮らし」「暮らしの中にある人間関係の絆」「集落の中で役立つこと」「集落内や近所との助け合い」「集落の一員である自分」というような“地域や近所との人間関係を説明するもの”、二つ目は「集落への愛着」「文化や伝統の継承」「集落存続への希望」のような“地域への意識・態度を説明するもの”、三つ目は「集落のまとまり」「集落内で集まる機会の減少」「新参者の受け入れにくさ」という“地域内の関係性を説明するもの”であり、そして四つ目には「自然と共生したくらし」「自然を守りたい」というような“自然との関係性を説明するもの”である。

1. 領域Ⅰ「地域や近所との人間関係を説明するもの」

1) 集落の人とのふれあい（コードの割合14.4%）

「集落の人とのふれあい」とは、人々の暮らしの中に顔と顔を合わせた関わり合いがあることを説明するカテゴリである。

集落における日々の暮らしの中で、人々は知人に出会えば、それが道端であろうと田畑であろうと立ち止まって会話をするということが頻繁にあり、「地域の人といろんな話をしたり、どこの人がどうなったとか、そういうことで地域の様子がわかる」（J氏）というように、人々はこうした関わりを通じて、集落内の冠婚葬祭のこと、誰かの病気や入院に関すること、あるいは勤め先などといった集落の人がおかれている環境や境遇に関することを知り得ていた。また、集落には趣味活動や旅行、祭礼や懇親会などといった人々が寄り合う活動が多くあったが、人々はこうした場を集落の人との交流の場として認識しているのと同時に、こうした場に対し「近所の友達に出会ってしゃべったり、減多に出会えん人に出会ったのも楽しみ」（G氏）というように、集落の人々との出会いを期待する思いも抱いていた。人々のこうした関わり合いの背景には、これまで同じ集落で生活してきた歴史や、現在もこうして共に暮らしていること、そして未来に向かっての連続的な関わりがあることを想定した思いがあるようであった。

2) 和を大切にしたい暮らし（コードの割合10.0%）

「和を大切にしたい暮らし」とは、人々が調和を重

んじ、同時にそこに価値を見出しながら周囲との歩調を合せた暮らしぶりをしていることを説明するカテゴリである。

集落において、祭礼や集落の清掃などの地縁活動、冠婚葬祭への関わり、入院時の見舞いなどを介した様々な付合いがあることは、里山の暮らしを特徴づける一側面であるが、人々はこのような関わりに対し「田舎で人と違うことをしてはダメ」（H氏）、「近所の人ややることはできるだけやる、そういうことは付合いで当たり前だと思っている」（G氏）と語り、できるだけ近所と同様の行動をすることを心がけていた。また、長い歴史の中で近所との密接な関係が築き上げられている日々の暮らしでは、自分の生活状況によって近所へ不利益や不快感を与えないように配慮することが大切であると考えており、これは集落の回覧板が自分の都合（旅行による不在など）でストップしてしまわないように、留守にすることを隣の家に伝えることや、自宅の脇にある柿の木の実が落ち、集落の里道を汚さないように管理するなどといった内容で語られた。そして「ここで喧嘩したら皆友達でおってくれん、全体の調和を大切にしたいと仲良くやっていくことが一番」と語るF氏の言葉には、仲良くしながらも干渉しすぎず、かといって無関心でもないというようなほどほどの関係性の中で、調和を重んじそこに価値を見出し暮らしている集落の人々の姿が表されていた。

3) 暮らしの中にある人間関係の絆（コードの割合16.8%）

人々は日々の暮らしの中で、近所あるいは集落の人と結びつきや深い間柄があることを感じていた。これは相手への気遣い、声かけ、助け合い、信頼関係の維持といった意味合いの語りで現されたが、これを説明するカテゴリが「暮らしの中にある人間関係の絆」である。

「夜になると、近所の家にあかりが灯っているとか、気になって見たりして、電気がついてれば元気だなと思う」。こういった（J氏）の語りは、近所や集落の人に気持ちを馳せ、皆が元気で暮らしていて欲しいと願う人々の気持ちを象徴していた。また、集落内で生じる冠婚葬祭への人々の関心は特に高く、暮らしの中で冠婚葬祭に関する情報が得られれば、知り得た情報をまた他の人に伝えながら、自分自身も慶弔事へ積極的に関わろうとしていた。こうした関係性については「何かあった時、地域の中には本当に一生懸命になってくれる人たちがいる・・・（中略）・・・そういう関係ができていますね」（A

氏) というような言葉で語られ、その他にも「近所の人がないと生活が成り立たない」という意味合いの言葉が多く語られた。ただ、こういった関係性は、どちらか一方がいつも助けられる側になっているということはほとんどなく、自分の労力や持ち得る資材を提供するなどして、何らかの形で相互に助けたり助けられたりするというような相互関係として成り立っていた。暮らしの中にこうした関係性があることによって、人々は近所の人とは気心が知れた仲間、信頼できると認識していたが、近年では人と人との関係性が希薄になりつつあるため、集落内でつながっていると感じられる人の人数や範囲が狭くなっている様子も窺われた。

4) 集落の中で役立つこと (コードの割合3.2%)

人々は自治会や町内会といった地縁的な活動、あるいはボランティアや市民活動などを通し、集落で自分をどのように役立てるかを考えていた。これを説明するカテゴリーが「集落の中で役立つこと」である。

暮らしの中で人々は、たとえば、花作りを得意とする人は、集落の人々が喜んでくれる姿を思い浮かべながら道端に花を植え管理し、農業が好きな人は、野菜が沢山収穫できればそれを隣近所へ配る。また、毎日自宅近くの道路を歩いて登下校する集落の子どもの安全を願い、ボランティアでその見守りをし、そして、近所に高齢者世帯があれば「何か困っていることがないか」などといって声をかける。人々のこうした行動は、暮らしの中に自分の特技や強みを活かせる場があるから生じるものであったが、その背景には「何か行事がある時は、お掃除とか、できる限りのことは顔を出して、少しでも手伝えれば手伝いたいと思っています」(F氏) というような、集落の中で何らかの形で役立ちたいと願う気持ちがあった。この他にも、集落の集会所の修繕、神社の社の立て直しや用水路の建設などといった集落資源の維持管理活動に積極的に関わることも含まれていた。また「地域の色々な組織の活動に参加することも、地域の役に立っているということでひとつの生きがいになる」(B氏) というように、これは達成感や生きがいなどとも関連しているようであったが、役立ちたいという気持ちやそこから生じる行動が受け入れられるかどうかは集落内の関係性に依存する側面もあることが窺われた。

5) 集落内や近所との助け合い (コードの割合6.9%)

里山の暮らしには、労力、資材、資金などを提供し合う人と人との関係性があり、人々が寄り添い協

力しながら生きる姿があった。これを説明するカテゴリーが「集落内や近所との助け合い」である。

集落では「あんたんとこキュウリある？」といったような、日常会話を通じて自宅で収穫した農作物のおすそわけが日常的に行われており、この他にも御萩などに代表される季節の郷土料理、集落の山で採った山菜などさまざまなものが、持っている人から持っていない人へ行き渡るような関係性があった。人々はこういった暮らしの一場面を集落の良い所、あるいは生活の中の潤滑油などという言葉で表現し肯定的に捉えていた。また、A氏が語った「近所では親戚と違った意味でお互いに助け合いの部分がある」というのは、暮らしの中における欠けや困難への対応のことであったが、これは主に近所を中心とした集落の人々が留守中の世話をしたり、葬式などのイベントの際に心を寄せながら共に対応していることなどを表していた。この他にも、近所付き合いに関する様々な助言、大雨や大雪、あるいはそれに伴う自然災害時の助け合いなども語られ、遠い親戚よりも近くの他人というような関係が人々の日々の暮らしの中に築き上げられていることを示していた。

6) 集落の一員である自分 (コードの割合2.8%)

自分が集落の一員として受け入れられた存在という感覚と認識があり、それを肯定的に捉えながら暮らす人々。これを説明するカテゴリーが「集落の一員である自分」である。

集落の暮らしでは、自己と他者あるいは自己と集落の関係性を感じる場面が多く、冠婚葬祭時の義理関係は、自分が集落の一員であるということを強く認識する代表的なきっかけとなっていた。この他にも、旅行から帰ってきた際などの「どこに行っていたの、寂しかった」などという他者の反応や、集落自治に関する意見を求められることなども、集落の一員という認識を喚起させるきっかけとなっていた。また、集落内の付き合い(義理関係や地縁活動など)を生活の一部として捉え、積極的に関わることもそれらの認識を高めていた。こうした暮らしの中の関わりを通して、今ここに集落に受け入れられた一員として自分が存在していること、集落に自分の居場所があるということを実感していた。

2. 領域Ⅱ「地域への意識・態度を説明するもの」

1) 集落への愛着 (コードの割合8.9%)

人々の集落に慣れ親しんでいるという感覚や、集落のことを広く深く知っているという自信と誇り。そして、集落そのものをかけがえのない存在として

重んじる価値観とそこから生まれる集落への特別な思い、これを説明するカテゴリーが「集落への愛着」である。

集落に澄み渡る空気、溢れる湧水や日々の暮らしの中で目にする山や川などの自然とそこに生息する動植物は、人々の心を強くひきつけ「私はこの土地が好き、私たちにとってここは大事な土地」(H氏)といった、集落に対する特別な思いを生じさせていた。特に里山という定住性が高い地域では、これまでの歴史の中で多様な人間関係が形成され、特有の自然環境との関わりの中で、そのメカニズムを活かしながら、自然と共生した生活文化を形成してきた。このような暮らしの中では、集落の気候、地形、地質などの特徴や、そこから生まれた集落機能や文化を知することは生活を維持する上で不可欠であり、なかには集落のある特定の人にしか伝承されない情報(たとえば湧水が出る場所)さえもあった。人々はこのような集落の歴史やそこから生まれた生活文化を広く深く知っていることに自信と誇りを感じていた。また、山間に佇む民家、集落に広がる田畑、急な勾配もあれば平坦な地点もある里道、そしてこれらの要素と豊かな自然とが複雑に絡み合い創出される集落固有の風景。こういった豊かな自然に恵まれ、地形の変化に富んだ集落そのものや、これらと関わりながら営まれる暮らしの中に人々はかけがえのない価値を見出し、今ここに存在している集落そのものの存在と、それを形作る全てのものを自分たちの財産として認識していた。

2) 文化や伝統の継承(コードの割合5.0%)

集落の特有の文化や伝統は、生業やしきたり、あるいは集落内の付き合いの中に受け継がれており、人々は暮らしの中でこういった文化や伝統にふれながら生きてきたため、人々にとっては今後も守り続けたいもののひとつとなっていた。これを説明するカテゴリーが「文化や伝統の継承」である。

集落の文化の象徴のひとつでもある祭礼やならわしなどは、長い年月受け継がれたものであり、行われる時期や内容には全て意味があって、里山の知恵が凝縮されている。人々は、集落の氏神や観世音菩薩、あるいは山の神、水神や稲荷などにまつわる伝統行事を続け、そういった伝統行事そのものの存在とそれに関連するしきたりなどを将来に渡り守っていくことや、集落の特性を色濃く映し出すその土地ならではの食文化を後世に伝えたいと考えていた。「古臭いかもしれないけど伝統をつないでいけることがこういう田舎のいいところだと思う」(D氏)。こ

れはしきたりや伝統のもつ多面的な機能を理解し、今後も守っていききたいと願う気持ちからの語りであった。近年では、過疎化と高齢化の進行により、しきたりや伝統をつなぐ担い手消滅の危機に直面しているため、様々な工夫を凝らすことが必要不可欠となっていた。

3) 集落存続への希望(コードの割合5.2%)

長い年月をかけて受け継がれてきた集落は、人と人、あるいは人と自然との関わり合いの歴史が刻み込まれているため、人間関係、景観、生活文化、伝統といった様々な要素からなる複合体といえる。そのような自分たちの集落を将来に渡って守り、深め、そして活かすような暮らしを営みながら、そこに価値を見出し次世代へ引き継ぎたいと人々は思っていた。これを説明するカテゴリーが「集落存続への希望」である。

元来長い歴史をもつ集落では、資源の維持・保全、生産活動などにおける相互補完、生活場面での相互扶助といった集落機能が維持され、集落における共同体としての自治が成立していた。しかし近年では、集落の中で子どもの遊ぶ姿を見かけることが少なくなり、外に出ても顔を合わせるのは高齢者ばかりという日々の暮らしが多くなった。こういった肌で感じる人口減少の感触も、人々の集落存続への不安を助長させていたが、その中でも何とか集落を守り発展させ、明るい地域として存続してほしいという強い気持ちを人々は抱いていた。「花なんかを市道に植えることにも反発なんかはあるかもしれんけど、自分の地域を少しでも良くしたい」(D氏)というように、人々は、誰かにお任せでは自分たちの集落は崩壊してしまうと考え、自ら集落の生活道路の改善に取り組んだり、行政に対し開発のための提案をしたりして様々な行動もおこしていた。

3. 領域Ⅲ「地域内の関係性を説明するもの」

1) 集落のまとまり(コードの割合5.2%)

集落には、祭礼や一斉清掃などの地縁活動をはじめ様々な活動があり、同じ目的のために住民同士が協力して共に働く機会が多いが、人々はこれらの活動に関わることを通じ、自分たちが一つにまとまっていると感じていた。これを説明するカテゴリーが「集落のまとまり」である。

集落の暮らしの中に見られる協同作業では、人々が共通の規範に沿って一つにまとまって関わる姿があり、また、その結果として得られる達成感を人々が共有することで無形ではあるが集落のまとまりと

して感じられるものが形成されていた。「地域の過疎化みたいなものも、皆でまとまって楽しみながらカバーしてきたと思います」(D氏)。こういった語りに現されている集落のまとまりに関する人々の認識は、里山という条件的にも様々な制限がある暮らしの中で、日々遭遇する様々な困難に対し、人々が寄り添い協力しながら一団となって暮らしを営んできた歴史の積み重ねがあるからこそ生まれるものであった。

2) 集落内で集まる機会の減少(コードの割合4.1%)

里山には長い年月をかけて営々として守り発展させてきた集落に伝わる祭礼、行事、しきたりが多いため、これまでの暮らしの中では、事あるごとに集会所や自宅に集落の人々が寄り合うことが多かった。しかし、そのような機会が戦後から徐々に減少し、最近では特に少なくなってしまった。これを説明するカテゴリーが「集落内で集まる機会の減少」である。

里山では、集落の新年会などの行事があれば一同に会して飲食を共にし、冠婚葬祭や法事などの出来事があれば集落中とはいかないまでも、向こう三軒両隣は必ず招くというような習わしがあった。また、日常においても近所に茶のみ友達の輪などがあったため、こういった機会を通し集落の人々は実際に顔を合わせふれあうという直接的な交流が多かった。しかし近年では、人々の集まるきっかけがなくなりつつあるのと同時に、集まるきっかけがあったとしても、集まる人数が少ないという現状があることを「皆が自分の生活だけが大事になってきた感じがあるね」(F氏)という語りが象徴していた。

3) 新参者の受け入れにくさ(コードの割合1.9%)

里山という定住性が高い地域では、これまでの歴史の中で人と人との特有な関係性が形成されてきたため、閉鎖的で排他的な傾向となりやすい。このような性質をもちやすい集落では、他の集落から自分たちの集落へ転入してきた人たちとは、実際にはほとんど付き合いがない状態であった。これを説明するカテゴリーが「新参者の受け入れにくさ」である。

集落の人々は、自分たちの集落に新たに転入してきた人たちのことを「他所から来た人」や「知らない人」という意味合いの言葉を使用して認識しており、そういったいわゆる新参者が、集落の地縁的な活動や付き合いに深く関わることはほとんどない状況であった。「新しい人たちと集まる機会が少ないし、他所から入って来ると何か付き合いにくいね」(E氏)と語られたように、古くから集落に居住する者が「長

らく一緒に暮らした仲間」という壁を越えて、新参者と地縁的な活動や付き合いを通し親密に交流するということはほとんどないのであった。また、こうした関係性の背景には、新参者とどのような気持ちや態度で接し、どう付き合えばいいかわからないという古くから集落に居住する者の思いもあった。つまり、古くからの付き合いがある者同士は、相手の性格、気持ち、態度などを相互に適宜関連付けながら付き合いができるが、新参者に関しては関わり合うことがほとんどないため、どう関わればいいかわからないというのであった。

4. 領域Ⅳ「自然との関係性を説明するもの」

1) 自然と共生したくらし(コードの割合12.9%)

里山に暮らす人々にとっての自然とは、集落にある山や川、田畑、草木や野花、動物や虫の鳴き声、自然のにおいなどであったが、里山ではこのような自然と暮らしとが密接に関連しており、同時に、人々はそうした自然に対する様々な感情や認識を育んでいた。これを説明するカテゴリーが「自然と共生したくらし」である。

人々は暮らしの中で、自然から与えられることで自らの生活が潤い支えられ、そして生かされていることを深く認識しており、自然の存在やその恵みに感謝する心を育んでいた。それをB氏の「朝起きて用事がないときは、ほとんど畑か田んぼに出て行く。田畑の実りをもらって食べるということは、その命をもらうということ…(中略)…田んぼの稲や畑の野菜を育て、そのお陰で生きられるというように思いながらやっている」という語りが象徴していた。また、人々は集落の山や自宅近くの井戸に湧く水に感謝し、田畑を耕し農作物を育てながら旬の野菜や山菜を収穫して生活するという営みの中で、抗うことができない壮大な自然のメカニズムを知り自然に恵まれる技と術を培っていた。こうした暮らしでは、自らが額に汗して活動しなければならないことが多いが、人々は自然に囲まれた環境であるからこそ経験できることだと肯定的に捉えていた。そして「自然が心の豊かさを作ってくれるような気がする」(D氏)。「最近私は1時間でも鋤を持たないと自分が生きている気がなくなってきた…ここでは生活する糧を得るためにも動かないといけない…火を焚いたり田んぼに水をやったり…そういうことが健康にも役立ってると思う」(C氏)という語りは、里山では自然と自己あるいは暮らしとが分断されたものではなく、共に存在し切り離すことができない密接な

関係性を持っていることを象徴していた。この他に自然と密接な暮らしがあるからこそ感じられるような、自然の力に対する畏怖心も語られた。

2) 自然を守りたい (コードの割合26%)

里山に暮らす人々は集落の自然に対し“自然は自分に恩恵を与えてくれる存在”という認識を少なからず持っていたが、人と自然との関係性の変化から、景観の荒廃や里山特有の動植物の衰退などが進行したため、自然は一昔前とは比べものにならないほど変化してしまった。人々は今後これ以上自然環境を悪化させないように、あるいは現在よりも改善させたいという強い気持ちを持っていた。これを説明するカテゴリーが「自然を守りたい」である。

里山に住む人々は、これまで集落の山では薪を拾い山菜を採り、川では魚や貝などを採ってきた。また、野花や新芽をつけたす木々、あるいは紅葉などを愛でながら田畑を耕し、自然の中に生活の糧と心の潤いを求める暮らしを長らく続けてきた。しかし今日では、放棄された田畑が荒地と化し、山では入る道すらなくなりつつあり、川の魚なども大幅に減少してしまって「水も山もある、生き物もいるけど、昔の自然と比べたら比べ物にならん」(A氏)というくらいにまで元来の風景や生態系が質・量という両面から劣化し失われつつある。このような現状を目の当たりにした人々は「自然を荒らさずに汚さないようにすることが自然への恩返し…農薬だって使いすぎれば自然に対して負担になる」(B氏)、「山がどんどん少なくなっていく…何とかこの山を守っていきたい…」(F氏)と語り、自然への感謝の気持ちを携えながら、自分たちの生活や行動が自然へ負の影響を与えてきたことを認め反省し、それが最小限にとどまるように努めながら、失った自然が少しでも回復すよう自然を育て、以前のように様々な生命を育む豊かな自然に戻していこうとしていた。

Ⅳ. 考察

今回の研究では、里山の人々の暮らしに焦点をあてSCの特徴について探求した。分析の結果、各カテゴリーは、以下の4つの領域、すなわち“地域や近所との人間関係を説明するもの”“地域への意識・態度を説明するもの”“地域内の関係性を説明するもの”“自然との関係性を説明するもの”となったが、この4つの領域の中でも、自然との関連性を説明するものについてはこれまでのSC論ではあまり検討されてこなかった側面であると考えられ、これは本

研究で注目すべき点であると思われた。「ここに暮らして、私は最近クワを持たないと生活しているっていか、自分が生きてるって感じがなくなってきた…少しでもクワを持つと自然の一員となってる感覚になるんです。自然のメカニズムの中で、自給自足をしながら人と人との絆を保つ生活ができる。いろんな意味で人間が人間らしく生きられる所がここなんです」というC氏の語りがこれを象徴していると考えられる。C氏は、田植えを終えたばかりの5月の田んぼの水面が、山間から顔をのぞかせる青空の下でキラキラと輝やくのを見ながらこう語るのであった。また、C氏に促され、作業小屋(インタビューをおこなった場所)の壁に目を移すと、集落活動を写した数多くの写真が飾られていた。集落の住民が一同となって集落内の山を手入れしている場面や、集落内で採れた食材を利用した試食会の風景などがあった。“自然と共生した暮らしの中から人々の信頼関係や絆が生まれる”という意味合いの言葉を多くの人々が語った理由がこのとき十分理解できた。

SCを論じる場合、一般にその基本的な要素は、人々に対する“信頼”、助け合いの様な“規範”、人や組織間の“ネットワーク”であるといわれているが、里山ではこういった要素に上記の4つの領域を説明する要素が密接に関連していると考えられた。

以下では、今回導き出されたカテゴリーから里山のSCについて検討していきたい。

1. 里山の人々の暮らしにおけるSC

人々の暮らしから里山のSCを探った結果、里山では4つの領域がSCに関連している可能性があるということがわかったが、なかでも自然に関連した要因が導き出されたことは注目される。

Putnam (1993) の「Making Democracy Work」によって世界中から脚光を浴びることになった¹⁸⁾ SCであるが、その後の代表的な研究者による定義を概観してみても、自然という要素がSCの要素として捉えられているものはみつかることができない。SCの定義について、たとえば、Fukuyama²³⁾ は信頼と規範、Baker²⁴⁾ はネットワークから得られる、情報・アイデア・指示方向・ビジネスチャンス・富・権力や影響力・精神的サポート・善意・信頼・協力、Woolcock²⁵⁾ は、協同の行動を促進する規範とネットワーク、Lin²⁶⁾ は、ネットワークそのものではなく、目的を持った行動のためにアクセスしたり動員されるもので、社会構造の中に埋め込ま

れた資源としており、Ronald²⁷⁾は社会構造の中の個人の位置によってつくられる利点としている。この他にも世界銀行やOECDなどもSCの定義を提唱しているが、ほとんどの定義では人と人の関係性や、資源や制度へのアクセスといったことに焦点が当てられていると考えられる。つまり、SC論では、自然環境は社会共通資本²⁸⁾として捉えられることが多いため、SCに関連したものとして論じられることがほとんどない(e.g. 要藤²⁹⁾、佐藤³⁰⁾、糸林³¹⁾)のであろう。しかし、生活圏域に多くの自然が存在する里山では、自然環境の上に生活が成り立っているため、自然との密接な関連が里山の暮らしを特徴づけることも多い。たとえば、山の仕事や農業がある里山では、山に神が宿るとして山の神を祀り、田や用水路の近くには水神を祀る。こういった人々の認識に加え「畑へ行って野菜とたわむれながらその命を育て、野菜の命をいただけるおかげで自分達が生きている」と語られたのは、里山の人々が集落の自然を脈々と生き続けている存在のように捉えていることを象徴していると考えられる。

山間に点在する畑で野菜とたわむれ、その野菜のおかげで自分達が生きられていると認識し、大雨や大雪など予期できない自然現象に見舞われれば、自然からの戒めだと感じ自然に対する自己のあり方を内観し日頃の生活態度を振り返る。この他、集落の山や川、田畑、草木や野花、動物や虫の鳴き声、自然のにおいなど自然の存在そのものが自分の人生を豊かにするものであると語る人々、こういった認識は自然と共に生き、そして自然を活かした生活から培われたものであるため、自然とそこに暮らす人々との間に密接な関係性があることを示している。しかしこうした認識は、自然との関係性が成り立っている里山であるからこそ生じるものであると考えられるため、里山の自然は人々の暮らしをより豊かにするための大きな資本となっていることを示唆するものであると考えられる。また、カテゴリー「自然と共生したくらし」と「自然を守りたい」がある、領域「自然との関係性を説明するもの」に含まれるコード数が、総コード数の15.5%を占めていることから、自然に関連した領域は重要な意味をもつ要素のひとつとして捉えることができそうである。

したがって、これまでのSC論における基本的なSCの要素は、Putnam³⁾の定義に代表されているように、一般的に信頼、規範、ネットワークであるといわれているが、里山におけるSCは、自然環境そのものを含み、自然との調和・共生を旨とする社会

生活から創出される、信頼、規範、ネットワークといった、自然と人間あるいは人間同士の結びつきを強める様な機能をもつものと考えることができそうである。

2. 各領域とSC

1) 領域I「地域や近所との人間関係を説明するもの」

里山では、日頃の近所付き合いや集落の人々との会話を通し様々な情報がやりとりされるため、思いもよらない人との交流を引き寄せたり、人々の親密性が一層高められることがある。さらに、集落内で長らく顔を合わせなければ、畑仕事に出かけた時についてに声をかけたり、様子を見にわざわざその者の家を訪問する。Putnam³⁾はネットワークの維持に関して、直接顔を合わせるネットワークが最も重要だと述べているが、里山ではこうした営みが、face to faceの関係になっていると考えられる。

また、こうした関係性がさらに発展すると、暮らしの中で、労力、資材、資金などを提供し合う間柄へと発展することあるが、これはMcCulloch⁸⁾のいう近所付き合いの波及効果によって構築されたSCの一側面であると考えられる。ただOECD³²⁾においても指摘されているように、こうした人々の関係性は過去の歴史が育んだ産物、すなわち、この背景には条件的にも限られた里山で人々が関わりあって生きてきたという側面が深く関連していると考えられる。

今回の調査では“何か役に立つことがあれば、少しでも役に立ちたい”という意味合いの語りが多くあった。一般にSCが豊かな地域ほど人々は献身的な行動をとりやすくなるといわれるため、こういった意味合いの語りは、集落の中でSCから利他的行動がとられていることを窺わせるものであると考えられる。

稲葉³³⁾はSC論において、心の外部性の重要性を指摘している。心の外部性とは人々の心に働きかけて、人々が認識して初めて意味を持つ大切だが目には見えない何らかの力だとされているが、里山では集落に自分の意見が反映されることや、集落全体から香典が出されることなど何らかの形で集落につながっていることが肯定的に捉えられていた。こういった個人と個人、あるいは個人と集落を結びつける要素も何らかの力として人々の心に働いているように思われる。

今回の研究では、この領域に含まれるコード数は、総コード数の半数以上を占めカテゴリー数とともに

最多であった。こういったことから、“ふれあい”や“絆”といった言葉で代表されるような、人々との関係性から育まれるSCの要素が、里山においても非常に重要であるということが窺える。

2) 領域Ⅱ「地域への意識・態度を説明するもの」

地域への意識・態度には、集落そのものあるいは、集落の文化や伝統を大切にしたいという気持ちがあったが、これは、たとえば、花を植え集落の景観をよくすること、冠婚葬祭時の各自の役割を責任を持って果たすこと、神社仏閣の管理をきちんとすることなどであった。集落ではそれぞれの活動に対して独自の規範（たとえば、集落の者が入院した時などに隣近所が誘いあって見舞に行くこと、旅行の際の留守のお願い、葬儀の時には隣の家が僧侶の送迎をすることなど）があり、人々はこの規範にそって自分の役割を果たしていた。また、こういった活動に関わることで、これまでのネットワークが維持されたり、新たなネットワークが構築されることも珍しくない。Putnam³⁾自身も、SCの礎には地域の歴史とその独特の社会的文脈があること指摘しているように、里山においてもこうした歴史や文化に関わることはSCの維持、構築に関連していると考えられた。

また、集落を大切に思う気持ちから、集落内の道端に簡単な花壇を作り花を植える、するとそれを見た人が話しかけてきたり、噂話をしたりして直接的にも間接的にも人と人とながつながっていく。こうした人々の行動も、人と人をつなげる要素として働いていると考えられる。

この領域に含まれるコード数は、総コード数の約19%であったが、集落の歴史や、そこから生まれた固有の文化に関わってきたことで築き上げられた人々の集落への思いが、好き、守りたい、存続して欲しいという気持ちとして現され、またこういった思いがあるからこそさらに集落に関わる。人々のこのような認識と行動がSCの一側面を担っていると考えることができる。ただ、一方で、自分達がこの集落の現状を何とかしなければならぬと語るように、過疎化・高齢化の急速な進展という負の要素が、人々の危機感を喚起させ団結力やネットワークを強化するように働く可能性があることも窺われた。

3) 領域Ⅲ「地域内の関係性を説明するもの」

里山での暮らしには、人々の間のまとまりがあるということが多く語られた。そして、それを象徴しているのがD氏の語りであろう。里山では、気象、気候、地理条件などが直接暮らしに影響を与えるた

め、人間の力をはるかに超えるようなできごとに遭遇することも少なくない。大雨や大雪、あるいはそれに伴う自然災害などに遭遇した時には、人々は協力し合い、寄り添って生きなければならない。Jacobs³⁴⁾が、SCは一人きりでは成立せず、個人を取り囲む社会的ネットワークの重要性を強調しているように、里山では他者に協力し、寄り添える個々人の存在と、その関係性を受け入れられる集落のあり方がSCと密接に関連していると考えられる。この領域に含まれるコード数は、総コードの約11%で最小であり、カテゴリーを見ても“団結力がある”“集まる機会が減少”と、一度見ただけでは相反するカテゴリーが含まれており、整合性がとれていないように感じられるかもしれない。しかしこれは、集落にはまとまりといった団結力が重要だということを、人々が認識しているからこそ導き出されたものであると考えられる。実際に人々は、この関係性を価値あるものとして認識し、生きる自信にもつながっている。しかし“新参者＝知らない人”と認識されることが多いように、集落への新たな転入者が集落内の付き合いへそのまま溶け込めることは稀である。つまりこのような里山のSCの側面は、性質面における結合型（bonding）³⁵⁾、すなわち固い絆や結束があり内部志向的な特徴を現していると考えられ、地縁的つながりなどの結合性が強く、外部との橋渡しの要素が弱いという農村の特徴²⁾を含んでいると考えられる。したがって里山においては、横断的で広範囲なつながりを持つことを可能にする、橋渡し型（bridging）SCが醸成されることも必要であろう。

4) 領域Ⅳ「自然との関係性を説明するもの」

今回の調査では、集落内の人々の間には、“気心が知れている”“何もかも知った仲”というような意味合いの語りが数多くあり、信頼感や団結力が非常に高いことが窺われた。こういった住民同士の関係性には、里山の生活様式も大きく関連している可能性がある。里山には、自然界と良い関係を保とうとする生活様式が根付いており、人々は自然の恵みを享受し分け合いながら生活を営んでいる。集落の山や土地で採れた山菜や旬の野菜をおすそわけという形で分配することもあれば、山に湧出る天然水や自然の草木などを集落の自然の恩恵として皆で分かち合い活用する。こういった暮らしの中には、自分の生活だけ良ければいいという認識はなく、他の人も同じようによくなって欲しいという気持ちか根付いている。また、時に大雨や大雪、あるいはそれに伴

う自然災害といった厳しい自然の姿を目の当たりにする里山の暮らしでは、集落の人同士の協同作業としての雪かきや、土砂災害を未然に防ぐための作業などが不可欠となっている。つまり、生活範囲の多くを自然が占める里山では、人々は抗えない自然の力を知り、その中で生かされているという気持ちを抱かざるを得ない。自然を分かち合い自然の中で助け合いながら、時に自然に寄り添い従って生きることが、安心・安全な暮らしを確保することにつながっていくため、こうした自然と共にある暮らしが人と人々を様々な面でつなぐ拠り所を提供していると考えられる。

また、「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉で表わされることが多い互酬性の規範³³⁾、この互酬性には均衡のとれた互酬性（等価交換）と一般化された互酬性（現時点では不均衡でもいずれ均衡をとれるという期待を基にした交換）がある³⁵⁾といわれているが、里山において最も日常的な規範は、自宅で収穫した野菜や、集落の山で採れた山菜などをやりとりする関係性の中に存在していると考えられる。たとえば里山では、自宅で栽培する野菜が、他の人よりも数日早く収穫できれば、以前野菜などをもらった人の家へその野菜を持って行きお礼として渡す。また、集落の山で季節の山菜が採ればそれを近所で分け合い、そしてそれをもらった人もまた同じように野菜やもらった山菜を加工した物などで返礼する。まさにこういった日常の風景が里山を特徴づける規範のひとつになっているのではないかと考えられる。つまり里山では、地域の自然、あるいはその自然の恵みを介し発達する規範があり、これが集落内の人間関係を円滑にするよう機能しているのである。この領域に含まれるコード数が、総コードの約15%を占めることから、自然に関する要素は人々の連帯と調和に重要な役割を担っていると考えられる。

しかし一方で、こういった互酬性の規範がある里山では、予期せぬ返礼等などは相手に規範が破られたと感じさせてしまうこともある。たとえば、集落の山で採れた山菜を持っていったら、お礼にメロンが届いたというように、期待された規範が破られた場合（返礼に等価性がない場合など）は、これまでの滑らかな人間関係が崩れてしまう危険性があるのである。これは定住性が高い里山においては、日々の暮らしの中で一般化された互酬性と、均衡のとれた互酬性の価値に相違があることを示唆するものかもしれない。

また里山の暮らしでは、隣近所とのネットワークを介し集落内の冠婚葬祭の情報を得たり、隣近所の人の病中や留守中の世話や最小限の金銭（たとえば自治会費）の貸し借りなどが行われている。これは、里山での暮らしが隣近所とのネットワークに依存する部分が少なくないことを示していると考えられることができるが、こうしたネットワークが暮らしの中でどのようにして育まれているのかを考えると、そこには自然と共生した里山の暮らしの存在が大きな意味を持っていると思われる。里山には、定期的な山の手入れや間伐材の利用、自然の形状に逆らわず作られた里道の維持管理、古木・巨木を地域の宝として代々守ってきた活動や、自然を無駄なく活用しその恩恵によって営まれる暮らしがあった。このような生活様式が集落の人同士の小さなつながりを育み、結果的に集落内のネットワークを形成する。したがって、こうした暮らしの連続が自助・共助を促し、結束と協同的な行動を生じさせやすくしていると考えられる。

3. 研究の限界

SCに関する研究においては質的研究の必要性は指摘されながらも、その方法論が確立されているとはいえない。その中で本研究が質的研究に取り組んだという性質上、データ収集や分析に研究者の能力が影響を与えていることは否めない。また今回の研究では、ありのままの生活を語ってもらうために地域の社会的文脈に焦点をあてる研究方法を採用し、Dudwickら²²⁾の調査、分析の視点を参考に研究を進めたが、全ての側面において十分な検討ができたとはいえず、特に政治的行動については人々の暮らしからほとんど捉えることができなかった。このようなことを踏まえると、調査した4地区はいずれも中山間地域であるものの、本研究結果をそのまま他の中山間地域へ適用することには限界がある。今後は様々な地域で研究を継続して行い、中山間地域に共通するものを見つけ出していくことが必要である。

V. おわりに

本研究では里山の人々の暮らしを読み解くことを通し、里山におけるSCの特徴について探求した。その結果、里山においては、従来のSC論における信頼、規範、ネットワークに「自然と共生した暮らし」「自然を守りたい」というような、自然に関連した要因が密接に関連している可能性があることが

わかり、これが豊かに暮らすための大きな資本になっていることが示唆された。これは里山のSCを特徴づけるひとつの要素であるように思われるが、これまでのSC論では自然という要素が十分に扱われてきたとはいえないのではないだろうか。したがって、今後は本研究で示唆された自然関連要因がSCの要素となり得るのか、なるとすればこれまで示されているSCの各要素とどのような関連性があるのかなどを量的研究等で明らかにし、その上で人々の健康面への影響を含めた検証がなされることが必要であると思われる。

謝辞：本研究にご参加くださいました皆様に心から感謝いたします。また、地域・在宅看護学分野の安田貴恵子教授には、特に質的分析の過程において、地域に暮らす人々の語りの捉え方について沢山の光を照らしていただき、進むべき方向性を示していただきました。ここに記して感謝いたします。この他、里山・遠隔看護学分野の多賀谷昭教授、那須裕特任教授、そして院生の皆さまをはじめ、研究の遂行にあたり貴重なご助言をくださいました皆様に深く感謝いたします。

文献

- 山根洋右：農村におけるライフスタイルの分析とヘルスプロモーション技法の開発に関する研究。日本農村医学会誌，44(4)：625-634，1995。
- 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会：農村のソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係の維持・再生に向けて。農林水産省農村振興局(東京)，2007。
- Putnam R. D. : Making Democracy Work. Princeton University Press, 1993. 川田潤一訳，哲学する民主主義。NTT出版(東京)，2001。
- Kawachi I., Kennedy B. P., Lochner K., et al. : Social Capital, Income Inequality and Mortality. American Journal of Public Health, 87:1491-1498, 1997.
- Subramanian S. V., Kawachi I., Kennedy B. P. : Does the state you live in make a difference? - Multilevel analysis of self-rated health in the US -. Social Science & Medicine, 53(1):9-19, 2001.
- Subramanian S. V., Kim D. J., Kawachi I. : Social trust and self-rated health in US communities—A multilevel analysis—. Journal of Urban Health, 79 (4) Supplement (1):S21-34, 2002.
- 市田行信，吉川郷主，松田亮三ほか：日本の高齢者—介護予防に向けた社会疫学的大規模調査 11 ソーシャル・キャピタルと健康—。公衆衛生，69(11):914-919，2005。
- McCulloch A. : Social environments and health—Cross sectional national survey. BMJ, 323: 208-209, 2001.
- 埴淵知哉，村田陽平，市田行信ほか：保健師によるソーシャル・キャピタルの地区評価。日本公衆衛生雑誌，55(10):716-723，2008。
- Lauder W., Reel S., Farmer J., et al. : Social capital, rural nursing and rural nursing theory. Nursing Inquiry, 13(1):73-79, 2006.
- 国際協力事業団(JICA)：ソーシャル・キャピタルと国際協—持続する成果を目指して—[事例分析編]。国際協力事業団国際協力総合研修所(東京)，2002。
- 田上豊資：保健師活動とソーシャル・キャピタル—これまでもこれからも—。保健師ジャーナル，67(2):127-131，2011。
- 今村晴彦，印南一路：地区組織活動についての全国調査から—ソーシャル・キャピタルを醸成する保健師活動のヒント—。保健師ジャーナル，67(2):119-126，2011。
- Drevdahl D., Kneipp S. M., Canales M. K., et al : Reinvesting in social justice—A capital idea for public health nursing? Advances In Nursing Science, 24(2):19-31, 2001.
- Carpiano R.M. : Actual or potential neighborhood resources for health. —What can Bourdieu offer for understanding mechanisms linking social capital to health? In:Kawachi I., Subramanian S. V., Kim D. editors. Social capital and health. Springer (New York), pp.83-93, 2008.
- Whitley R. : Social capital and public health—Qualitative and ethnographic approaches. Kawachi I., Subramanian S. V., Kim D. editors. Social capital and health. Springer (New York), pp.95-115, 2008.
- 市田行信：ソーシャル・キャピタル—地域の視点から—。近藤克則 編，検証「健康格差社会」—介護予防に向けた社会疫学的大規模調査—，医学書院(東京)，pp 107-19, 2007。
- 木村美也子：ソーシャル・キャピタル—公衆衛

- 生学分野への導入と欧米における議論より一、保健医療科学, 57(3):252-265, 2008.
- 19) 金川克子：地域看護診断一技法と実際. 東京大学出版会(東京), 2000.
 - 20) 近藤克則：健康格差社会—何が心と健康を蝕むのか. 医学書院(東京), 2005.
 - 21) 斎藤嘉孝：社会的サポート. 近藤克則 編, 検証「健康格差社会」—介護予防に向けた社会疫学的大規模調査一, 医学書院(東京), pp91-97, 2007.
 - 22) Dudwick N., Kuehnast K., Nyhan Jones, V., et al : Analyzing Social Capital in Context : A Guide to Using Qualitative Methods and Data, World Bank Institute Working Paper The World Bank(Washington D.C.), 2006.
 - 23) Fukuyama F. : Trust—The Social Virtues and the Creation of Prosperity, 加藤寛 訳, 「信」無くば立たず, 三笠書房(東京), 1996.
 - 24) Baker W. : Achieving Success Through Social Capital, 中島豊 訳, ソーシャル・キャピタル, ダイヤモンド社(東京), 2001.
 - 25) Woolcock M. : The Place of Social Capital in Understanding Social and Economic Outcomes. ISUMA Canadian Journal of Policy Research, 2 (1):11-17, 2001.
 - 26) Lin N. : Social Capital—A theory of Social Structure and Action. Cambridge University Press, 2001. 筒井淳也, 石田光規, 桜井政成 ほか訳, ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論, ミネルヴァ書房(京都), 2008.
 - 27) Ronald S. B. : Brokerage & Closure—An Introduction to Social Capital, Oxford University Press(New York), 2005.
 - 28) 宇沢弘文：社会的共通資本としての医療を考える. 宇沢弘文, 鴨下重彦 編, 社会共通資本としての医療, 東京大学出版(東京), pp17-35, 2010.
 - 29) 要藤正任：ソーシャル・キャピタルは地域の経済成長を高めるか？—都道府県データによる実証分析—. 国土交通政策研究, 61号, 2005.
 - 30) 佐藤誠：社会資本とソーシャル・キャピタル. 立命館国際研究, 16(1):1-30, 2003.
 - 31) 糸林誉史：ソーシャル・キャピタルと新しい公共性. 文化女子大学紀要 人文・社会科学研究, 15:75-85, 2007.
 - 32) Healy T., Cote S. : The Well-being of Nations—The Role of Human and Social Capital, Paris, 2001. 日本経済調査協議会訳, 国の福利—人的資本及び社会的資本の役割, 日本経済調査協議会(東京), 2002.
 - 33) 稲葉陽二：ソーシャル・キャピタル入門. 中央公論新社(東京), 2011.
 - 34) Jacobs, Jane : The Death and Life of Great American Cities. Random House (New York), 1961.
 - 35) 内閣府国民生活局：ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて. 国立印刷局(東京), 2003.

研究報告

離島保健師が離島内に居住することと地域看護活動との関連

The association of nursing activities with the everyday life of public health nurses in remote islands.

青木さぎ里, 春山早苗
Sagiri Aoki, Sanae Haruyama

キーワード：離島, 保健師, 地域看護活動, 離島居住, 自己の生活

要旨

本研究の目的は、離島において保健師が住民と同じ地域で生活することと地域看護活動との関連の有無、及び、関連する地域看護活動を明らかにし、住民のヘルスニーズを充足でき離島という地域特性に合った保健師の活動方法を考察することである。離島を活動地区とし、その離島内に保健師自身が居住している市町村常勤保健師（17都道府県63市町村284名）を対象に、郵送式無記名自記式質問紙調査を行った。回答者の90.4%は住民と同じ地域で生活することと地域看護活動に関連があると認識していた。関連していると認識している地域看護活動には27カテゴリの活動の目的、並びに、37カテゴリの活動の方法があった。結果から、離島保健師が住民と同じ地域で生活することに関連している地域看護活動の特徴には、住民と同じ地域の生活者としての視点を持つことを意識化し活用すると同時に、接点を持つ住民や住民との関係性に偏りが生じることも意識し地域看護活動の公平性に努めることが考えられた。保健師の活動方法には、自身が生活者と保健師の両方の視点を持つことを意識化し、生活者と保健師の知恵や知識を地域看護活動に意図的に融合することが示唆された。

I. はじめに

離島は、周囲を海に囲まれていること（環海性）、面積が一般に狭小であること（狭小性）、本土の経済・文化の中心から遠く離れていること（隔絶性）といった地理的特性がある。離島が地理的にも、歴史、文明、文化的にも隔絶されることは、社会生活の基盤整備の遅れや経済活動上の不利な条件となり、生活向上、経済発展において相対的に立ち遅れ、人口減少や急速な高齢化が起り、生活基盤や就業機会など定住条件の維持に不安をもたらしている¹⁾。一方で、海、陸からの多様な恵み、島ならではの明るく光り輝く風景、隔離された中で育まれる独自の文化、さらに、狭ければ狭いほど住民が互いに顔見知りで深くつながるなどの特徴も生まれ、だからこそ、住民は島を愛し、誇りに思い、島で暮らしたいと希望を抱く²⁾と言われている。このように、離島の地理

的特性は、離島住民の生活に有利性と不利性の両側性をもたらしている。

離島における地域看護活動においては、離島の地理的特性は、生活や地域把握の容易性、保健医療福祉の統合性の可能性、情報共有性、物的・人的資源の活用、多面的な人材活用、自助努力の必然性につながる有利性として捉えることができ、活動上の強みになるといわれている³⁾⁴⁾。一方で、離島保健師は、研修や休みが自由に取れない、私生活と仕事の区別が困難、身近に相談者がいないなどの困難感を抱いているという報告⁵⁾もある。

離島によっては、保健師が島外から通勤することは困難で、保健師が地域看護活動を展開するために「住民と同じ地域で生活する」ことが必要となる。離島内で生活する保健師は、保健師としての活動対象地域と個人としての生活の範囲が重なるため、保

受付日：2012年11月17日 採択日：2013年5月7日
自治医科大学看護学部 Jichi Medical University, School of Nursing

健師にとって活動対象である住民は親戚や友人・知人でもあり、保健師の生活は常に住民に見られているなど、地域看護活動のしにくさや生活しにくさを感じる⁶⁾ことがある。しかし、活動対象地域と私生活の範囲が重なることは困難感ばかりではなく、離島保健師自身を支えるインフォーマルなネットワークが保健師として行う地域看護活動を支えるシステムとしても機能する⁷⁾こともあり、地域看護活動に不利性と有利性の両方をもたらしているといえる。

離島は島内のみで一定の生活圏を形成しなければならない⁸⁾ため、互いの存在や活動が互いの生活に直接作用する。保健師と住民の関係も、専門職が住民を支援するという一方的な関係ではない。限られた空間であるため、住民の諸活動により保健師の生活が成り立っていることは容易に理解できる。そのため、離島保健師は、保健師としての立場が一住民としての生活に与える影響、一住民としての生活が保健師としての立場に与える影響なども考慮しながら活動していると考えられる。

保健師が対象となる住民と同じ地域で生活することは、文化人類学⁹⁾や民族看護学¹⁰⁾などで文化を理解する際に用いる参加観察に近い状況にあると考えられる。保健師は専門職としてエティック (etic) な見方で外部から地域を客観的に捉えながら、同時に、地域生活集団の一員となり人々の生活の場で共に行動し内部者としてイーミック (emic) な見方で地域を理解する。イーミックな文化の知識とエティックな保健師の知識を合わせることで、住民の文化や価値観、ニーズに適った効果的で満足をもたらす地域看護活動が可能となる。

へき地で看護活動を展開するには、看護職は個人、コミュニティ、専門家としての3つのニーズを満たさねばならない¹¹⁾といわれている。個人のニーズとは、利害関係や看護職とその家族が存在するコミュニティの中での社会交流をすること、コミュニティのニーズとは、へき地の住民に適切なケアを伝え提供するためにコミュニティの文化を理解すること、専門家のニーズとは、適切な継続教育プログラムを受け専門家として満たされることである。これまで、個人としてのニーズに対しては本人が個人で解決すべきものとされ¹²⁾、離島やへき地の看護職への支援としての取り組みはほとんどなされていない。

しかし、個人のニーズを満たすことをおろそかにすれば住民との社会交流が阻害され、イーミックな見方で地域の文化を理解することにも影響する。離

島保健師が住民と同じ地域で生活することと離島保健師の地域看護活動との関連を知ることは、離島の地域特性に合った保健師のよりよい地域看護活動方法を検討する上でも、個人のニーズを満たす方法を検討する上でも必要である。

そこで、本研究では、離島で活動する保健師が住民と同じ地域で生活することと地域看護活動との関連について、保健師の認識を確認し、さらに、関連している地域看護活動を明らかにして、住民のニーズを充足し、離島の地域特性に合った保健師の地域看護活動方法を検討することを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 用語の定義

離島保健師：離島を活動対象地域としている市町村保健師とした。

保健師の生活：本研究では、保健師の勤務時間以外の全ての活動とした。

地域看護活動：所属する自治体に生活している人々の健康やQOLの向上を目指した市町村保健師の活動¹³⁾とし、保健師が「何(目的)」に「どのように(方法)」¹⁴⁾働きかけるのかを含むものとした。

地域看護過程：看護過程¹⁵⁾の定義を参考に、地域把握、ニーズ明確化、計画立案、実施、評価の段階を有し、一連の流れが目標に到達するまで繰り返されるものとした。

2. 対象者

離島を活動地区とする市町村常勤保健師のうち、その離島内に保健師自身が居住している保健師を対象とした。2007年度版離島統計年報を参照し、離島を有する各市町村保健主管課に問い合わせた。対象となる保健師数は平成22年3月末時点で17都道府県63市町村284人であった。

3. データ収集項目

1) 保健師の属性

(1) 現在勤務している離島での保健師経験期

当該離島に居住して保健師として勤務している年数を調べた。先行研究等¹⁶⁻¹⁷⁾に基づき、経験年数から、新任期(1～5年目)、中堅期(6～20年目)、ベテラン期(21年目以上)に分類した。

(2) 勤務している離島の人口区分

分類は離島統計年報の離島の人口区分を参考に、保健師が勤務している離島の人口について、5,000人未満、5,000人以上10,000人未満、10,000人以上

30,000 人未満, 30,000 人以上 50,000 人未満, 50,000 人以上に分類した。

(3) 勤務している離島のタイプ

離島統計年報の離島のタイプの分類を参考に本土とのアクセスや周辺離島との地理的關係性から、内海・本土近接型離島、外海・本土近接型、群島主島型離島、群島属島型離島、孤立大型離島、孤立小型離島に分類し(表1)、これらを選択肢として調べた。

2) 保健師の離島居住と地域看護活動との関連

(1) 保健師の離島居住と地域看護活動との関連に対する認識

離島保健師が住民と同じ地域(離島)で生活すること(以下、保健師の離島居住)と地域看護活動との関連について、関連していると認識しているかどうかを確認するために、地域看護過程の地域把握、ニーズ明確化、計画立案、実施・評価の各段階についてそれぞれ、関連あり、関連なしのいずれかを選択してもらった。

(2) 保健師の離島居住に関連がある地域看護活動の内容

保健師の離島居住に関連があると認識している地域看護活動の内容を、地域看護過程の段階別に自由記述で求めた。また、特定の段階に該当しない場合はその他として記述してもらった。

4. データ収集方法

郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。

離島統計年報2007年度版から離島を有する市町村を調べ、市町村の保健主管課へ電話で問い合わせ研究対象となる保健師の人数を確認した。研究対象となる保健師がいることを確認できた全ての市町村の保健主管課長あてに、研究協力依頼書、調査票、切手貼付済み返信用封筒を該当保健師数分送付し、研究対象となる保健師全員への配布を依頼した。

調査期間は、平成22年4月末から平成22年6月末としたが、期日までの回収率が30.0%であったため、調査協力を求める文書を改めて送付して調査期間を7月末まで延長した。

5. 倫理的配慮

調査票発送時に、研究の趣旨、調査への協力は自由意思であること、研究は無記名であり個人や地域は特定されないこと、研究結果の公表方法、調査票の返信をもって同意したとみなすこと、研究者の連絡先などを明記した研究協力依頼書を同封した。特

表1 離島のタイプと定義

離島のタイプ	定義
内海・本土近接型離島	本土の中心的な都市から航路1時間圏内にあり、かつ航路の欠航がほとんどないと考えられる離島
外海・本土近接型離島	本土の中心的な都市から航路1時間圏内にある、内海・本土近接型以外の離島
群島主島型離島	本土の中心的な都市から航路1時間圏外にある群島(人口概ね5,000人以上の大型島を中心としそれに航路1時間以内で近接する複数の離島)の中心的な離島
群島属島型離島	群島主島以外の群島型離島
孤立大型離島	上記以外の離島で、かつ人口が概ね5,000人以上の孤立型離島
孤立小型離島	孤立大型以外の孤立離島

※沖縄県については「本土」を沖縄本島として回答するように依頼した

に、地域特性からわずかな情報でも地域や個人が特定される可能性があるため、記載には十分注意してもらうよう記載した。なお、本研究は自治医科大学大学院看護学研究科の研究倫理審査会の承認を得て行った。

6. 分析方法

- 1) 保健師の離島居住と地域看護活動との関連に対する認識は、地域看護過程の段階別、及び属性ごとに関連ありと回答した者の割合を出した。
- 2) 保健師の離島居住に関連がある地域看護活動の内容は、地域看護過程の段階ごとに、自由記述内容から活動の目的と活動の方法の一つの意味を成す単位で取り出し、一次データとした。なお、実施段階と評価段階は併せて実施・評価段階として自由記述を求めたが、意味内容から記述内容を実施段階と評価段階に分けて分析した。
- 3) 2) で取り出した活動の目的の一次データについて、地域看護過程の段階ごとに、その共通性から分類し、その内容を表した。それを意味内容が損なわれない程度まで繰り返し、最終の分類名をカテゴリ、その一つ前をサブカテゴリとした。活動の方法の一次データについても同様にした。

Ⅲ. 研究結果

調査票の回収数は104通、回収率は36.6%であった。

1. 回答者の基本属性(表2)

回答者の基本属性を表に示す(表2)。当該離島での保健師経験期は、新任期42人(40.3%)、中堅

表2 回答者の属性

属性 回答者数	保健師経験期			離島の人口区分						離島のタイプ						
	新人期	中堅期	ベテラン期	5,000人未満	5,000人以上 10,000人未満	10,000人以上 30,000人未満	30,000人以上 50,000人未満	50,000人以上	不明	内海・本土近接型	外海・本土近接型	群島主島型	群島属島型	孤立大型	孤立小型	不明
回答者数 (%)	42 (40.3)	41 (39.5)	21 (20.2)	29 (27.9)	21 (20.2)	19 (18.3)	19 (18.3)	15 (14.4)	1 (0.9)	14 (13.5)	6 (5.8)	28 (27.0)	14 (13.5)	25 (24.0)	16 (15.3)	1 (0.9)

表3 地域看護過程の段階別の保健師の離島居住と地域看護活動との関連に対する認識

人 (%)			
	関連あり	関連なし	無回答
地域把握	91 (87.5)	9 (8.7)	4 (3.8)
ニーズ明確化	84 (80.8)	17 (16.3)	3 (2.9)
計画立案	78 (75.0)	22 (21.2)	4 (3.8)
実施・評価	71 (68.3)	27 (26.0)	6 (5.7)
いずれかの段階で一つ以上 関連ありと回答した者 (再掲)	94 (90.4)	7 (6.7)	3 (2.9)

表4 保健師属性ごとの保健師の離島居住と地域看護活動との関連に対する認識

属性 関連の認識	保健師経験期			離島の人口区分						離島のタイプ						
	新人期 n=42	中堅期 n=41	ベテラン期 n=21	5,000人未満 n=29	5,000人以上 10,000人未満 n=21	10,000人以上 30,000人未満 n=19	30,000人以上 50,000人未満 n=19	50,000人以上 n=15	不明 n=1	内海・本土近接型 n=14	外海・本土近接型 n=6	群島主島型 n=28	群島属島型 n=14	孤立大型 n=25	孤立小型 n=16	不明 n=1
関連あり	38 (90.5)	37 (90.2)	19 (90.5)	25 (86.2)	21 (100.0)	18 (94.7)	16 (84.2)	13 (86.7)	1 (100.0)	13 (92.9)	6 (100.0)	24 (85.7)	12 (85.7)	25 (100.0)	13 (81.3)	1 (100.0)
関連なし	2 (4.8)	3 (7.3)	2 (9.5)	2 (6.9)	0 (0.0)	1 (5.3)	2 (10.5)	2 (13.3)	0 (0.0)	1 (7.1)	0 (0.0)	3 (10.7)	2 (14.3)	0 (0.0)	1 (6.2)	0 (0.0)
無回答	2 (4.8)	1 (2.4)	0 (0.0)	2 (6.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (12.5)	0 (0.0)
合計	42 (100.0)	41 (100.0)	21 (100.0)	29 (100.0)	21 (100.0)	19 (100.0)	19 (100.0)	15 (100.0)	1 (100.0)	14 (100.0)	6 (100.0)	28 (100.0)	14 (100.0)	25 (100.0)	16 (100.0)	1 (100.0)

期41人（39.5%）、ベテラン期21人（20.2%）であった。勤務している離島の人口区分は、5,000人未満が最も多く29人（27.9%）、次いで5,000人以上10,000人未満が21人（20.2%）であった。勤務している離島のタイプは、群島主島型離島が最も多く28人（27.0%）、次いで孤立大型離島が25人（24.0%）であった。

2. 保健師の離島居住と地域看護活動の関連に対する認識

保健師の離島居住と地域看護活動との関連に対する認識について、地域看護過程の段階別及び属性ごとに関連ありと回答した者の割合を表3、表4に示す。

地域看護過程の段階別では、関連ありと認識している者の割合は、地域把握の段階が87.5%で最も高く、地域看護過程の段階が進むほど低くなり、実施・評価の段階では68.3%であった。保健師の離島居住と地域看護活動との関連について、地域看護過程の全段階のうち一つ以上の段階で関連ありと認識して

いる者は94人（90.4%）であった。

関連ありと認識している者の割合が90.0%を超えていた属性の項目は、保健師経験期では全ての経験期であり、離島の人口区分別では、5,000人以上10,000人未満、10,000人以上30,000人未満、離島のタイプでは、内海・本土近接型、外海・本土近接型、孤立大型であった。

3. 保健師の離島居住に関連した地域看護活動

保健師の離島居住に関連があると保健師が認識している地域看護活動（以下、保健師の離島居住に関連した地域看護活動）の目的と方法について、以下に地域看護過程の段階ごとに述べ、最後に特定の段階に該当しない活動についてその他として述べる。カテゴリは【 】で示す。

1) 地域把握の段階（表5）

地域把握の段階では、回答者104人のうち84人（80.8%）が保健師の離島居住に関連した地域看護

表5 地域把握の段階における保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	生活条件とその成り立ちの把握	生活条件を把握する(49)
		島内外の利用可能な保健・医療・福祉資源の施設と活動の実態を把握する(19)
		社会資源利用や生活上の離島ゆえの不便さ・限界を把握する(18)
		生活や価値観の背景となる歴史・文化を把握する(15)
		地域の行事・風習を把握する(12)
		実際に地域で生活している住民数を把握する(2)
		健康課題の原因と背景の明確化に関連する情報を入手する(1)
	住民の日常生活・生活行動の把握	日常生活を把握する(42)
		食生活を把握する(21)
		運動習慣を把握する(4)
		住民の買物内容を把握する(4)
	住民個々、家族、集団ごとの特性の把握	ストレス、休息の取り方を把握する(3)
		地区ごとの特性を把握する(30)
		住民個々の詳細な情報を把握する(22)
		地区・年代・職業ごとの生活の特徴を把握する(6)
	住民の価値観や考え方の把握	地域や生活スタイルごとの疾患傾向を把握する(3)
		家族ごとの生活の変遷を把握する(3)
		住民の価値観や考え方を把握する(34)
		住民が地域に対して抱いている認識を把握する(5)
	住民性の把握	住民の関心事・要望を把握する(5)
		住民の保健医療資源利用に対する意識を把握する(2)
		住民性を把握する(18)
		地域住民の方言やコミュニケーション方法を把握する(5)
活動の方法	住民としての生活経験や住民との接点に意識的に情報収集する	自分の生活で得た情報のみに基づいて住民性を捉える(1)
		住民の家族・親戚・友人・近隣関係を把握する(7)
		住民同士のつながり方とその強さ、変遷の把握
		住民同士のつながり方とその強さ・変遷を把握する(6)
	地域に根付いた活動に一住民として共同することを通じて地域を把握する	地域のキーパーソンを把握する(7)
		活用可能な地域の人材を把握する(5)
		住民と同じ生活を実際に経験し、理解を深める(16)
		日常生活で住民との付き合いや接点に、意識して情報を得たり観察をして地域把握につなげる(18)
	自分の生活者としての立場を認識した上で地域を把握する	生活している住民だからこそ得られる情報を地域把握につなげる(8)
		地域把握のために勤務時間外に意識して情報収集する(5)
		担当しているケースの情報を本人との生活での接点に入手する(3)
		地域行事の場で地域や住民を観察して把握する(2)
	生活での接点を利用し住民と関係を構築して情報収集しやすくする	一住民として地域行事に参加して地域や住民を把握する(5)
		地区組織活動で住民と一緒に活動して、人材や地域を把握する(3)
		趣味活動を住民と一緒にしながら住民個々を観察し把握する(1)
		出身地や島民との親戚関係の有無など住民としての立場を意識して地域を把握する(4)
	住民を個々あるいは家族ごとに継続的に観察して把握する	長く住むことで住民の視点に近づき住民との認識の誤差を減らす(4)
		保健師としての立場と生活者としての立場の両方から、地域を理解する(1)
		生活での接点に住民と人間関係を構築し、情報収集しやすくする(5)
		生活の中で住民と関わる機会を多く作り、地域把握につながる情報を得る(3)
	住民と親密になることや一住民として地域の理想像を抱くことは、地域把握に影響を与えることを意識して、地域把握をする	住民を個々あるいは家族ごとに継続的に観察して把握する(4)
		地域に住み住民と密接になることは長短所あることを意識して住民や地域を把握する(2)
		一住民として抱く地域への思いが地域把握に影響することを意識する(1)
		住民個々の本音を生活での接点に聞きとり把握する(2)
	住民個々の本音を生活での接点に聞きとり把握する	住民個々の本音を生活での接点に聞きとり把握する(2)
		生活で捉えた情報を保健師間で共有し地域把握しやすくする
	生活で捉えた情報を保健師間で共有し地域把握しやすくする	生活で地域について理解した情報をデータ化、文章化して示す(1)
		他保健師の当該地域に関する認識を把握し、地域を把握しやすくする(1)

※ () は一次データ数を示す。

活動をあげていた。

活動の目的は7カテゴリとなり、【生活条件とその成り立ちの把握】、【住民の日常生活・生活行動の把握】、【住民個々、家族、集団ごとの特性の把握】、

【住民の価値観や考え方の把握】、【住民性の把握】、【住民同士のつながり方とその強さ、変遷の把握】、【活用可能な地域の人材の把握】であった。

活動の方法は8カテゴリとなり、【住民としての

表6 ニーズ明確化の段階における保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	解決すべき課題の優先順位や解決に要する時間の判断	地域の将来を見据えたニーズを明確にする(3)
	住民個々のニーズの明確化	解決すべき課題とその優先順位, 解決の要する時間を判断する(2)
	統計からは現れにくい健康問題やニーズの明確化	住民一人ひとりのニーズを明確にする(2)
		統計からだけでは現れにくい健康問題やニーズを明確にする(1)
活動の方法	一住民として経験する日常生活や地域行事等での住民との共同から把握した情報を積み重ねニーズを明確にする	地域や住民に関して生活で把握した情報から, 地域の健康課題やニーズを明確にする(39)
		住民個々感じている健康課題や困りごと, 要望を直接聞き取り, ニーズ明確化につなげる(14)
		一住民として経験する日常生活や地域行事や地区組織活動を通して積み重ねた情報からニーズを明確にする(6)
		住民と密接な関係を構築して, 様々な声を聞き取る(1)
	自分や家族が島内で健康問題に対処した経験から把握した個のニーズを基に, 地域住民に共通するニーズを検討する	自分や家族が島内で健康問題に対処した経験から把握した個のニーズを基に, 他の住民に共通するニーズを検討する(9)
	統計的な数値データを住民個々の生活実態と照らし合わせて分析し, ニーズを明確にする	統計結果を表面的な数値だけでなく生活の中で実際の地域や住民個々人と照らし合わせて分析し, ニーズを明確にする(3)
		地域にとけこみ住民との関わりを深めて, 将来の課題を予測する(2)
		生活の中で住民個々や地域を観察する際, 住民一人ひとりの健診結果を思い起こし結び付けながら把握する(1)
	地域住民として身につけた習慣や価値観, 地域を熟知しているという自信から他地域と比較する視点が乏しくなることを意識して, 客観的にニーズを分析する	地域住民に同化することで他地域と比較する視点が乏しくなることを意識し, 他地域と比較して地域の課題を明確にする(4)
		地域について把握していると過信してしまいやすいことに注意し, 根拠となるデータに基づいてニーズを明確にする(1)
	介入できていないケースについて生活のなかで情報を得て介入のタイミングを判断する	保健師個人の習慣や価値観にとらわれないよう注意し客観的に地域のニーズを分析する(1)
	関係機関と協働して地域のニーズを明確にする	介入できていないケースについて生活のなかで情報を得て介入のタイミングを判断する(2)
	対象となる住民数に応じて住民のニーズを的確に把握する手段を選択する	関係機関と協働して地域のニーズを明確にする(1)
		対象となる住民数に応じて住民のニーズを的確に把握する手段を選択する(1)

※ () は一次データ数を示す。

生活経験や住民との接点に意識的に情報収集する】、【地域に根付いた活動に一住民として共同することを通じて地域を把握する】、【自分の生活者としての立場を認識した上で地域を捉える】、【生活での接点を利用し住民と関係を構築して情報収集しやすくする】、【住民を個々あるいは家族ごとに継続的に観察して把握する】、【住民と親密になることや一住民として地域の理想像を抱くことは, 地域把握に影響を与えることを意識して, 地域把握をする】、【住民個々の本音を生活での接点に聞きとり把握する】、【生活で捉えた情報を保健師間で共有し地域把握しやすくする】であった。

2) ニーズ明確化の段階 (表6)

ニーズ明確化の段階では, 回答者104人のうち49人(47.1%)が保健師の離島居住に関連した地域看護活動をあげていた。

活動の目的は3カテゴリとなり, 【解決すべき課題の優先順位や解決に要する時間の判断】、【住民個々のニーズの明確化】、【統計からは現れにくい健康問題やニーズの明確化】であった。

活動の方法は7カテゴリとなり, 【一住民として経験する日常生活や地域行事等での住民との共同から把握した情報を積み重ねニーズを明確にする】、【自分や家族が島内で健康問題に対処した経験から把握した個のニーズを基に, 地域住民に共通するニーズを検討する】、【統計的な数値データを住民個々の生活実態と照らし合わせて分析し, ニーズを明確にする】、【地域住民として身につけた習慣や価値観, 地域を熟知しているという自信から他地域と比較する視点が乏しくなることを意識して, 客観的にニーズを分析する】、【介入できていないケースについて生活のなかで情報を得て介入のタイミングを判断する】、【関係機関と協働して地域のニーズを明確にする】、【対象となる住民数に応じて住民のニーズを的確に把握する手段を選択する】であった。

3) 計画立案の段階 (表7)

計画立案の段階では, 回答者104人のうち51人(49.0%)が保健師の離島居住に関連した地域看護活動をあげていた。

活動の目的は3カテゴリとなり, 【住民の価値観

表7 計画立案の段階における保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	住民の価値観やニーズに基づいた計画立案	住民の生活や価値観にあった計画を立案する(38)
		明らかになったニーズや健康課題に基づいた計画を立案する(2)
		個別性の高い計画を立案する(1)
	島内の限られた資源・環境を活用した実現可能な計画立案	島内の限られた資源・環境を活用した実現可能な計画を立案する(8)
活動の方法	住民の視点に立ち住民が理解できる計画の立案	住民の視点に立った住民が理解できる計画を立案する(3)
	住民との接点や住民間の関係性を活かし、生活の場や保健計画策定の機会における住民間の意見交換を活発化し、計画に反映させる	生活での住民との意見交換を計画につなげる(8)
		つながりのある住民を計画策定メンバーに選出して活発な意見交換を図り計画に反映させる(2)
	計画立案時に島外関係者に交通手段や離島特有のニーズについて理解を得よう働きかけ事業を実施できるようにする	事業に必要な人材を島外から確保できるよう連絡調整を行う(2)
		市全体の計画に離島地区のニーズが反映されるように立案する(2)
		限られた交通手段でも事業が実施できるよう連絡調整をして、計画を立案する(1)
	関係機関や地域のキーパーソンと協働して計画を立案する	市全体の計画が離島地区でも実現できるように、離島ならではの特殊性に対応するために事前の連絡調整を十分に行う(1)
		関係機関や地域のキーパーソンと協働して計画を立案する(2)
	住民との接点や関係性が偏ることにより保健活動の視点に偏りが出ないように注意して計画立案する	自分の生活の中で捉えた住民性に基づいて計画を立案すると偏った計画になりやすいことに注意する(1)
		住民との密接な関係により視点が偏らないように意識して計画を立案する(1)
	活動の根拠となっている情報は保健師の中だけに留めず保健計画等に表示するように意識的に文章化・データ化する	活動の根拠となっている情報は保健師の中だけに留めず保健計画等に表示するように意識的に文章化・データ化する(1)
	常に住民のニーズを確認し、ニーズの変化に合わせて計画を見直す	常に住民のニーズを確認し、ニーズの変化に合わせて計画を見直す(1)

※ ()は一次データ数を示す。

やニーズに基づいた計画立案】、【島内の限られた資源・環境を活用した実現可能な計画立案】、【住民の視点に立ち住民が理解できる計画の立案】であった。

活動の方法は6カテゴリとなり、【住民との接点や住民間の関係性を活かし、生活の場や保健計画策定の機会における住民間の意見交換を活発化し、計画に反映させる】、【計画立案時に島外関係者に交通手段や離島特有のニーズについて理解を得よう働きかけ事業を実施できるようにする】、【関係機関や地域のキーパーソンと協働して計画を立案する】、【住民との接点や関係性が偏ることにより保健活動の視点に偏りが出ないように注意して計画立案する】、【活動の根拠となっている情報は保健師の中だけに留めず保健計画等に表示するように意識的に文章化・データ化する】、【常に住民のニーズを確認し、ニーズの変化に合わせて計画を見直す】であった。

4) 実施の段階 (表8)

実施の段階では、回答者104人のうち49人(47.1%)が保健師の離島居住に関連した地域看護活動をあげていた。

活動の目的は9カテゴリとなり、【住民や地域の特性にあった方法による支援】、【住民が地域の現状

と保健課題を意識化できるための支援】、【地域内のネットワーク構築と関係機関との密接な関係の維持】、【住民の主体的行動への支援】、【サービスと対象者を結びつける支援】、【保健師自身が明らかにした地域の健康課題への取り組み】、【保健師の出身地に関わらず住民が相談しやすい関係の構築】、【活動の効果的な周知】、【住民の個人情報保護】であった。

活動の方法は9カテゴリとなり、【一住民として構築した住民との信頼関係、人間関係、仲間意識を活用し、活動しやすくする】、【保健師の生活時間も活用して個別支援を行う】、【生活の中でつながりのある住民の存在や一部の住民の事情を深く知ってしまうことによる活動のしにくさがあることを意識して活動する】、【勤務時間外でも住民が期待している役割に配慮して柔軟に活動する】、【保健師自身の島内での療養経験や生活で把握した島内関係機関の活動内容を基に関係機関と連携しきめ細かい一体的な支援を行う】、【不足する資源を保健師が担うことも含め、地域の限られた資源のなかで地域にあった方法を模索し活動する】、【個人情報の保護に敏感な住民の意識に配慮して活動する】、【支援住民が限定的にならないように注意して活動する】、【自分の生活が常に住民に見られていることを意識し住民に実施した保健指導に反しない生活を送ることで、指導内

表8 実施の段階における保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	住民や地域の特性にあった方法による支援	対象者個々を把握した個別性の高い援助を行う(5) 住民性にあった方法での活動を展開する(3) 地域性にあった方法で活動を展開する(3)
	住民が地域の現状と保健課題を意識化できるための支援	住民と情報やニーズを共有する(3) 住民が地域の現状や課題を意識化できるよう支援する(2)
	地域内のネットワーク構築と関係機関との密接な関係の維持	地域内のネットワークを構築する(2) 住民組織を育成する(1) 関係機関との密接な関係を維持する(1)
	住民の主体的行動への支援	地域のキーパーソンの理解と協力を得て一緒に活動する(3) 住民の主体的行動を支援する(1)
	サービスと対象者を結びつける支援	住民とサービスを橋渡しする(2) 住民個々のニーズにあったサービス提供者を選定する(1)
	保健師自身が明らかにした地域の健康課題への取り組み	保健師自身が明らかにした課題に取り組む(2)
	保健師の出身地に関わらず住民が相談しやすい関係の構築	住民が保健師に相談しやすい関係を構築する(1) 保健師が地元出身者でも住民が相談しやすいようにする(1)
	活動の効果的な周知	活動を効果的に周知する(1)
	住民の個人情報保護	住民の個人情報を守る(1)
活動の方法	一住民として構築した住民との信頼関係、人間関係、仲間意識を活用し、活動しやすくする	生活を通して住民と人間関係を構築し、情報入手や介入をしやすくする(13) 一住民としての側面も活用し、住民との信頼関係を築く(8) 生活での住民との接点に自分が保健師であることを周知する(4) 住民と同じ地域で生活することで、生活の苦楽や価値観を共有する(3) 住民との間にある親近感や信頼関係を活動に活かす(2)
	保健師の生活時間も活用して個別支援を行う	時間外でも住民の要望に応じ健康相談等個別支援を行う(8) 生活での住民との接点を活用して情報提供や説明を行う(3) 継続支援対象者との生活での接点を活用し、観察あるいは聞き取りを行い状況を把握する(2) 個別事例への積極的関与が終了したあとも生活の接点を利用して継続して長期間見守る(1) 求めに応じ住民が安心して話をできる状況をプライベートで整え話を傾聴する(1)
	生活の中でつながりのある住民の存在や一部の住民の事情を深く知ってしまうことによる活動のしにくさがあることを意識して活動する	プライベートでつながりの深い住民がいると活動しにくくなる可能性があることを意識して、活動する(3) 住民の人間関係や事情を深く知ること、活動しにくくなる可能性があることを認識したうえで、活動する(2) 深い事情を把握しているケースには配慮した活動をする傾向があることを意識する(1) 保健師が地元出身者ゆえに、内容によっては相談しにくいと思う住民がいることを意識する(1)
	勤務時間外でも住民が期待している役割に配慮して柔軟に活動する	住民が期待している時間外の対応に配慮して柔軟に活動する(2) プライベートな時間を割いても住民が要望する健康相談等に対応する(2) 住民が期待している保健師の役割に配慮して柔軟に活動する(1) 看護以外の様々な能力を駆使して、保健活動を展開する(1)
	保健師自身の島内での療養経験や生活で把握した島内関係機関の活動内容を基に関係機関と連携しきめ細かい一体的な支援を行う	保健師自身も含めた住民の経験や意見を活用して関係機関とのネットワークや連携体制を構築する(3) 保健師自身や家族が島内社会資源を利用し療養した経験を活かして、きめの細かい支援や助言を行う(2) 他機関の保健活動内容をプライベートを通して把握して、世帯ごとに一体的なサービスを提供できるよう保健師の活動内容を調整する(1)
	不足する資源を保健師が担うことも含め、地域の限られた資源のなかで地域にあった方法を模索し活動する	限られた資源のなかで、地域に合った方法を模索し活動する(3) 地域に必要なサービスがない場合は保健師がその役割を担い補う(1)
	個人情報の保護に敏感な住民の意識に配慮して活動する	情報保護が難しい地域特性を意識して対象者の秘密を守る(1) 個人情報が漏れることを心配している住民が多くいることを意識する(1)
	支援住民が限定的にならないように注意して活動する	活動対象住民が限定的にならないように注意して活動する(1) 特に密接な関係性にある住民であっても見て見ぬ振りせず保健師として対応する(1)
	自分の生活が常に住民に見られていることを意識し住民に実施した保健指導に反しない生活を送ることで、指導内容の信憑性や保健師への信頼性を高める	自分の生活が常に住民に見られていることを意識し住民に実施した保健指導に反しない生活を送ることで、指導内容の信憑性や保健師への信頼性を高める(1)

※ ()は一次データ数を示す。

表9 評価の段階における保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	活動後の住民の変化の把握	住民の意見・感想から評価を行う(7)
		活動後の地域の変化についての保健師自身による観察結果から評価する(2)
		住民からの自発的な現状報告から評価する(2)
	支援が住民個々や地域の事情を考慮できていたかの評価	支援が住民個々や地域の事情を考慮できていたかを評価する(5)
活動の方法	活動計画の見直し	活動計画の見直しをする(1)
	生活の中での観察や聞き取りにより活動後の地域や住民の変化を直接把握し、評価につなげる	活動後の住民や地域の反応や変化を生活のなかで直接観察あるいは聞き取り評価につなげる(14)
		生活で得た情報と統計的数値を関連付け幅広い側面から評価する(2)
		住民との関係を構築し、生活での接点に住民が気軽に経過報告をできるようにする(1)
	住民との密接な関係性や住民としての立場が評価に影響することを意識して客観性の確保に努める	住民との密接な関係性により評価しにくいことがあることを認識した上で、客観的に評価する(2)
		同じ地域で生活しているがゆえに気が付きにくい視点があることを意識して客観的に評価する(1)
	評価に用いた生活で捉えた地域や住民の変化は意識して数値化して示す	生活で自分と接点のある住民から把握した反応だけでは評価として偏りがあることを意識する(1)
		評価に用いた生活で把握した地域や住民の変化は意識して数値化して示す(1)

※ ()は一次データ数を示す。

表10 その他の保健師の離島居住に関連した地域看護活動の目的と方法

	カテゴリ	サブカテゴリ
活動の目的	保健師としての活動意欲の維持	保健師としての活動意欲を保つ(3)
	保健師自身のプライバシーの保護	保健師自身のプライバシーを保つ(1)
活動の方法	生活の中で住民の反応を肌で感じて活動意欲を高める	住民の期待や歴代保健師の活躍を肌で感じ、活動意欲を高める(4) 生活を通して対象の変化を感じることで、保健師としての活動意欲を保つ(1)
	離島での地域看護活動の強みを捉えて活動意欲を保つ	離島ゆえの限界があり工夫が求められることを強みだと捉え活動意欲を保つ(2)
		行政主催行事や住民との日常的な関わりなど、島内でできることを研修の一環として捉え、学ぶ姿勢で参加し、島外研修の不足を補う(2)
		公私の区別がないことは活動に活かせると前向きに捉える(1)
	島外研修を受けられるよう日程・旅費等を確保する	島外研修を受けられるよう日程・旅費等を確保する(1)
	公私の区別がつけられないことに対処する	離島では住民誰もが公私の区別がつけられないことを受けとめる(2)
		公私の区別がつけられない気まずさを回避するために、休日は自宅で過ごし、生活での住民との接触を避ける(1)

※ ()は一次データ数を示す。

容の信憑性や保健師への信頼性を高める】であった。

5) 評価の段階(表9)

評価の段階では、回答者104人のうち32人(30.8%)が保健師の離島居住に関連した地域看護活動をあげていた。

活動の目的は3カテゴリとなり、【活動後の住民の変化の把握】、【支援が住民個々や地域の事情を考慮できていたかの評価】、【活動計画の見直し】であった。

活動の方法は3カテゴリとなり、【生活の中での

観察や聞き取りにより活動後の地域や住民の変化を直接把握し、評価につなげる】、【住民との密接な関係性や住民としての立場が評価に影響することを意識して客観性の確保に努める】、【評価に用いた生活で捉えた地域や住民の変化は意識して数値化して示す】であった。

6) その他(表10)

特定の段階に該当しないその他の保健師の離島居住に関連した地域看護活動は、回答者104人のうち15人(14.4%)があげていた。

活動の目的は2カテゴリとなり、【保健師としての活動意欲の維持】、【保健師自身のプライバシーの保護】であった。

活動の方法は4カテゴリとなり、【生活の中で住民の反応を肌で感じて活動意欲を高める】、【離島での地域看護活動の強みを捉えて活動意欲を保つ】、【島外研修を受けられるよう日程・旅費等を確保する】、【公私の区別がつけられないことに対処する】であった。

Ⅳ. 考察

1. 離島保健師が住民と同じ地域で生活することに 関連している地域看護活動の特徴

保健師の離島居住に関連した地域看護活動の結果から、離島保健師が住民と同じ地域で生活することに関連している地域看護活動の特徴を以下に考察する。

1) 住民と同じ地域の生活者としての視点を持つことを意識化し、それを活用すると同時に、接点を持つ住民や住民との関係性に偏りが生じることも意識し地域看護活動の公平性に努める

結果の活動の方法には、地域把握の段階には【自分の生活者としての立場を認識した上で地域を把握する】や【住民と親密になることや一住民として地域の理想像を抱くことは、地域把握に影響を与えることを意識して、地域把握をする】などがあり、離島保健師は住民と同じ地域で生活することで、一住民としての立場や視点を持つこと、つまり地域生活集団内部からのイーミックな見方を持つことを意識化して、地域把握していた。

さらに、ニーズ明確化の段階には【地域住民として身につけた習慣や価値観、地域を熟知しているという自信から他地域と比較する視点が乏しくなることを意識して、客観的にニーズを分析する】があり、計画立案の段階には【住民との接点や関係性が偏ることにより保健活動の視点に偏りが出ないように注意して計画立案する】があり、住民と同じ地域で生活することにより、保健師自身に住民と同じ生活習慣や価値観が身につく、生活者としての視点に偏り客観性に乏しくなる可能性があることを認識し、保健師としての生活集団外部からの視点、つまりエティックな見方を意識的に用いて、ニーズ明確化や計画立案を行っていた。

加えて、実施の段階には【生活の中でつながりのある住民の存在や一部の住民の事情を深く知ってし

まうことによる活動のしにくさがあることを意識して活動する】が、評価の段階には【住民との密接な関係性や住民としての立場が評価に影響することを意識して客観性の確保に努める】があり、生活の中で接点のある住民や住民との関係性に偏りが生じるにより地域看護活動に悪影響を及ぼすことがないよう、生じている偏りを意識して客観性や公平性の確保に努める活動がなされていた。

保健師には地域の人々に平等に責任を持ち、生活と健康に関する社会資源を公平に利用・分配するという社会的公正が求められている¹⁸⁾。しかし、離島という他と隔てられた地域で住民と一緒に生活している以上、一部の住民と近い関係になることは避けられない。これを避けるということは、保健師やその家族が存在する地域内において、保健師個人が住民と交流することを否定することになり、保健師の個人のとしてのニーズを充足することができない。対住民との交流なしでは住民との接点や互いの意思疎通を図る機会も乏しくなり、住民の理解も深まらず、一住民としての視点つまり地域生活集団内部からのイーミックな見方で地域を捉えることも阻害されると考えられる。したがって、住民と同じ地域で生活している離島保健師は、保健師としての責務と個人のニーズ充足の両方を実現していくことが必要となる。

以上のことから、離島保健師が住民と同じ地域で生活していることに関連する地域看護活動には、住民と同じ地域の生活者としての視点を持つことを意識化し、それを活用すると同時に、接点を持つ住民や住民との関係性に偏りが生じることも意識し活動することで、地域看護活動の公平性に努めるという特徴があると考えられる。

2) 地域に根付いた諸活動に一住民として共同することで、地域にあった住民の力の結集方法や地区組織の生成プロセスの把握、及び、自身のネットワークの拡大あるいは強化をし、地域看護活動を円滑に進める

活動の方法には、地域把握の段階には【地域に根付いた活動に一住民として共同することを通じて地域を把握する】が、ニーズ明確化の段階には【一住民として経験する日常生活や地域行事等での住民との共同から把握した情報を積み重ねニーズを明確にする】があり、地域に根付いている住民集団及び個人単位で行う諸活動に一住民として他の住民と共同することを通して、保健師は地域把握やニーズ明確

化をしていた。

地域に根付いた活動には、地域の伝統・文化を継承した地域行事や地域の問題を解決するための地区組織活動、楽しみや生きがいとなる趣味活動等がある。保健師がこのような地域に根付いた諸活動において一住民として他の住民と共同することは、当該地域の住民の力を結集させる方法や住民を組織化していくプロセスを知る機会になると考えられる。

また、実施の段階には【一住民として構築した住民との信頼関係、人間関係、仲間意識を活用し、活動しやすくする】などがあり、生活の中で一住民としての立場から住民との関係や仲間意識を築くことが、地域看護活動を円滑に進めることにつながると認識して活動していた。行政保健師が地域で形成するネットワークについて越田¹⁹⁻²⁰⁾は、恒常的に機能するシステムとしてのネットワークと、保健師が日常的な地区活動のなかで形成しているネットワークがあり、日常的なネットワークが土台にあることで、システムレベルのネットワークの成立がより効果的に容易になると述べている。これらから、離島保健師は、地域に根付いた諸活動における一住民としての他の住民との共同を通して、インフォーマルなネットワークを住民との間に形成し、地域看護活動に利用できるネットワークを拡大あるいは強化して、地域看護活動を円滑に進めようとしているといえる。

以上のことから、離島保健師が住民と同じ地域で生活することに関連している地域看護活動には、地域に根付いた諸活動に一住民として共同することで、地域にあった住民の力の結集方法や地区組織の生成プロセスの把握、及び、自身のネットワークの拡大あるいは強化をし、地域看護活動を円滑に進めるという特徴があると考えられる。

3) 健康課題について住民と同じ資源を利用して対処した経験を参考に、地域のニーズを明確にし、関係機関との連携方法を検討する

結果の活動の方法には、ニーズ明確化の段階には【自分や家族が島内で健康問題に対処した経験から把握した個のニーズを基に、地域住民に共通するニーズを検討する】があり、実施の段階には【保健師自身の島内での療養経験や生活で把握した島内関係機関の活動内容を基に関係機関と連携しきめ細かい一体的な支援を行う】などがあった。このことから、離島保健師は住民と同じ地域で生活する中で、保健師自身や家族の健康課題について住民と同じ限

られた資源を利用して対処した経験から、自身や家族に生じたニーズが他の地域住民にも共通していないか、地域のニーズを探索したり、自身の経験から知り得た関係機関の活動内容も活かして関係機関と連携していた。これらから、住民と同じ地域で生活していることに関連する地域看護活動には、健康課題について住民と同じ資源を利用して対処した経験を参考に、地域のニーズを明確化し、関係機関との連携方法を検討する、という特徴があると考えられる。

4) 自らの生活を介して支援する

行政保健師の職業的アイデンティティに関して、根岸ら²¹⁾は職業と自己の生活の同一化は行政保健師に特徴的な概念であると述べている。前述のとおり、本研究結果においても保健師は自己の健康課題に取り組む経験をニーズ明確化や実施方法に関する保健師の知識・技術に積み重ねて活動しており、自己の生活体験が保健師としての仕事に生き、職業と自己の生活の同一化がなされているといえる。

加えて、住民と同じ地域で生活する離島保健師にとっては、職業と自己の生活の場である地域がぴったりと重なっているため、職業と自己の同一化を超えた特徴があると考えられる。活動の方法の実施の段階には【自分の生活が常に住民に見られていることを意識し住民に実施した保健指導に反しない生活を送ることで、指導内容の信憑性や保健師への信頼性を高める】があり、離島保健師は、保健師を含め住民同士の生活がよく見えることを活かし、指導内容を具現化した保健師の生活を住民に示すという間接的な住民への働きかけをしていた。小島は²²⁾日常生活は専門職と住民両者が共有できる世界であり、専門職は地域社会のコミュニティの内部に入ることによって構築する住民との関係を用いて、自らの日常生活を介し住民の持つ生活の知恵と専門知識を結びつけることが可能になる、と述べている。離島保健師が住民と同じ条件で健康を目指した生活を送り、健康課題に対処していった過程や保健指導の具体的な実践方法を身近な場で示すことは、自らの生活を介して支援する、という住民と同じ地域で生活していることに関連する。特に、離島保健師の地域看護活動の特徴であると考えられる。

5) 生活での住民との偶然あるいは意図的な接点を活用し保健師として対応することで、住民からの期待に応える

活動の方法には、地域把握の段階には【住民としての生活経験や住民との接点に意識的に情報収集する】や【生活での接点を利用し住民と関係を構築して情報収集しやすくする】、【住民個々の本音を生活での接点に聞きとり把握する】があり、評価の段階には【生活の中での観察や聞き取りにより活動後の地域や住民の変化を直接把握し、評価につなげる】などがあり、保健師は生活の中での住民との接点を活用し、地域把握や評価に必要な情報を得ていた。また、実施の段階には【保健師の生活時間も活用して個別支援を行う】や【勤務時間外でも住民が期待している役割に配慮して柔軟に活動する】などがあり、保健師は生活の中で個別支援をするなど、住民からの期待に応え意図的に接点を持ち地域看護活動を実施していた。

保健師が住民と同じ地域に生活していることで、保健師が住民との接点を得やすいことはもちろんのこと、住民側も保健師への接触が容易であり、そのために保健師の生活時間においても保健師としての役割を果たすことが住民から期待される。以上のことから、保健師が住民と同じ地域で生活することに関連している地域看護活動には、生活での住民との偶然あるいは意図的な接点を活用し保健師として対応することで、住民からの期待に応えるという特徴があると考えられる。

2. 住民のヘルスニーズを充足でき離島の地域特性にあった保健師の活動方法

離島保健師の居住地に関わらず、住民のヘルスニーズを充足でき離島の地域特性にあった保健師の活動方法について以下に考察する。

第1に、保健師は自身が生活者としての視点と保健師としての視点を持つことを意識化し、両方の知恵や知識を地域看護活動で意図的に融合することが重要である。レイニンガーが「人々から得られたイーミックな文化の知識は、その文化に適したケアをする上でのもっとも正しい知識基盤である」²³⁾と述べているように、住民のニーズや文化にあった地域看護活動を行うには、集団内部からの生活者としての視点で理解した文化の知識を基盤とし、集団外部からの保健師の知識を合わせることが重要になる。対象が捉える生活がどのようなものであるか²⁴⁾生活者の視点で捉える必要性は言われているが、特に

離島では、地理的に隔てられ独自の文化があること、日々の生活における相互扶助や離島独特の講組織²⁵⁾など住民が互いに助け合って生活を成り立たせてきた仕組みが今なおあり、生活者の視点で住民生活を理解することは、離島の地域特性にあった活動方法を考える上で重要であると考えられる。

本研究から離島保健師は、生活者としての視点を活用しつつも、生活者としての視点に偏ることを危惧し、活動の客観性と公平性のために、自身が生活者と保健師の両方の視点を持つことを意識化し、地域看護活動で意識的に融合させていたといえる。離島では医療福祉資源以外でも様々な生活条件が限られていることで、要介護高齢者の島外移動には火葬もニーズに含まれ²⁶⁾、単に保健医療福祉サービスを充実させるだけでは住民のヘルスニーズの充足につながらず、住民の葬法意識にも働きかける支援が必要となる離島もある。保健師が生活者としての視点と保健師としての視点の両方を持つことを意識化し、生活者と保健師の知恵や知識を地域看護活動で意図的に融合することが、住民のヘルスニーズを充足し地域特性に合った活動を展開するために重要である。

第2に、保健師の生活経験を地域看護活動へ活かすと同時に住民に及ぼす負の影響を考慮することが重要である。離島保健師の生活は、住民の力の結集方法や地区組織生成プロセスの把握、自身のネットワークの拡大と強化、ニーズ明確化や関係機関との連携、間接的な保健指導、住民からの期待への対応など様々な地域看護活動に関連していた。住民も保健師も互いの生活が見え接触が容易であることは離島の特性の一つといえるが、それを避けるのではなく、地域看護活動への活用を検討し、同時に、住民に及ぼす負の影響を考慮することは、離島の地域特性に合った保健師活動を生み出す方法になると考える。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究の調査票回収率は36.6%であり、離島保健師が住民と同じ地域で生活していることと地域看護活動との関連があると認識している者に回答者が偏っている可能性が考えられる。また、本研究では、質問紙調査により離島保健師の認識から、住民と同じ地域で生活していることに関連している地域看護活動を明らかにしたが、実際の地域看護活動との一致を確認し、また、具体的にどのように保健師自身の生活が関連して地域看護活動を展開しているの

か、までは明らかにしていない。

今後は、一定期間の離島保健師の活動を詳細に調べる等して、本研究結果を検証するとともに、住民と同じ地域で生活している離島保健師の地域看護活動の展開方法やその成果を明らかにする必要がある。

V. おわりに

本研究により、回答者である離島保健師の9割以上が、住民と同じ地域で生活することと地域看護活動が関連すると認識していることが明らかになった。また、関連していると認識している地域看護活動には27カテゴリの活動の目的、並びに、37カテゴリの活動の方法があった。

結果から、離島保健師が住民と同じ地域で生活することに関連している地域看護活動の特徴として、(1) 住民と同じ地域の生活者としての視点を持つことを意識化し、それを活用すると同時に、接点を持つ住民や住民との関係性に偏りが生じることも意識し地域看護活動の公平性に努める、(2) 地域に根付いた諸活動に一住民として共同することで、地域にあった住民の力の結集方法や地区組織の生成プロセスの把握、及び、自身のネットワークの拡大あるいは強化をし、地域看護活動を円滑に進める、(3) 健康課題について住民と同じ資源を利用して対処した経験を参考に、地域のニーズを明確にし、関係機関との連携方法を検討する、(4) 自らの生活を介して支援する、(5) 生活での住民との偶然あるいは意図的な接点を活用し保健師として対応することで、住民からの期待に応える、が考えられた。

また、住民のヘルスニーズを充足し離島の地域特性にあった保健師の活動方法として、保健師は自身が生活者としての視点と保健師としての視点を持つことを意識化し、両方の知恵や知識を地域看護活動に意図的に融合すること、及び、保健師の生活経験を地域看護活動へ活かすと同時に住民に及ぼす負の影響を考慮することが示唆された。

謝辞

調査にご協力いただいた離島保健師の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 山口広文：離島振興の現況と課題。調査と情報 635;4, 2009.
- 2) 野口美和子：島嶼看護高度実践指導者の育成と

将来への展望。沖縄県立看護大学紀要(12)別冊：149-154, 2011.

- 3) 大湾明美, 宮城重二, 佐久川政吉ほか：沖縄県有人離島の類型化と高齢者の地域ケアシステム構築の方向性。沖縄県立看護大学紀要(6)：40-49, 2005.
- 4) 新井信之, 渡部幹夫, 渡邊喜代子ほか：離島に勤務する保健師による活動の方向性 三宅島の精神保健福祉活動と家族の状況。医療看護研究2(1)：95-101, 2006.
- 5) 東京都利島村役場, 御蔵島村役場, 青ヶ島村役場：3島における保健師等技術職確保・定着事業報告書;72, 2007.
- 6) 青木さぎ里：. 保健師ジャーナル 64 (3)：276-282, 2008.
- 7) 田中美延里, 小野ミツ, 小西美智子：先駆的な公衆衛生看護活動を展開した保健師のキャリア発達—離島の町の保健師のライフヒストリーから—。城島大学保健学ジャーナル Vol.5(1)：16-27, 2005.
- 8) 前掲書1)
- 9) 青木恵理子：フィールドワークとはどのようなものか。波平美恵子, 文化人類学[カレッジ版] 第2版, 医学書院(東京), 17, 2009
- 10) レイニンガー：「文化ケアの多様性と普遍性」理論。マデリン M. レイニンガー, レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性, 医学書院(東京), 4-74, 2006.
- 11) Mason, W. : Oregon's economic crisis and national nursing shortage :A transformational opportunity for rural nursing areas. Online Journal of Rural Nursing and Health care, 4 (1), 1-18, 2004.
- 12) 前掲書5)
- 13) 金川克子：地域看護学の理論的基盤。金川克子, 地域看護学 地域の理論化をめざして, 日本看護協会出版会(東京), 13-18, 2000.
- 14) 日本看護協会：看護業務基準集(2007年改訂版), 日本看護協会出版会(東京), 7, 2007
- 15) 見藤隆子, 児玉香津子, 菱沼典子：看護学事典 第2版。日本看護協会出版会(東京), 160-161, 2011
- 16) 厚生労働省：新任時期における地域保健従事者の現任教育に関する検討会報告書, 2004.
- 17) 佐伯和子, 和泉比佐子, 宇座美代子ほか：行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の発達 経

- 験年数群別の比較. 日本地域看護学会誌7(1); 16-22, 2004.
- 18) 麻原 きよみ, 大森 純子, 小林 真朝ほか: 保健師教育機関卒業時における技術項目と到達度. 日本公衆衛生雑誌57(3):184-194, 2010
 - 19) 越田美穂子, 守田孝恵: 行政保健師が地域で行うネットワーク形成のための実践技術項目の検討. 香川大学看護学雑誌14(1):57-66, 2010.
 - 20) 越田美穂子, 守田孝恵: 地域看護領域における『ネットワーク』概念の文献的検討. 地域環境保健福祉研究13(1):1-16, 2010.
 - 21) 根岸 薫, 麻原 きよみ, 柳井 晴夫:「行政保健師の職業的アイデンティティ尺度」の開発と関連要因の検討. 日本公衆衛生雑誌57(1):27-38, 2010
 - 22) 小島光洋: 地域保健活動の実践基盤となる専門職と住民との関係性における考察. 民族衛生72(3):117-131, 2006
 - 23) レイニンガー:「文化ケア」理論の定義と理論の特質. マデリン M. レイニンガー, レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性, 医学書院(東京), 36-53, 2006.
 - 24) 平野かよ子, 金川克子: 保健活動の対象. 日本看護協会保健師職能委員会, 新版保健師業務要覧, 日本看護協会(東京), 64-66, 2006.
 - 25) 濱野香苗, 堀内啓子: 離島在住高齢者のQOLへのインフォーマルサポート等の関連. 日本看護研究学会雑誌35(5), 45-55, 2012.
 - 26) 古謝安子, 與古田孝夫, 豊里竹彦ほか: 火葬場のない沖縄県小離島における死亡状況と葬法に関する住民意識の検討. 民族衛生78(5), 109-119, 2012.